水戸市埋蔵文化財調査報告　第30集

台　渡　里　2

二〇〇九

水戸市教育委員会

水戸市埋蔵文化財調査報告第30集

台　渡　里　2

― 市道常磐283号線公共下水道工事に伴う発掘調査報告書（台渡里第51次）―

２００９

水戸市教育委員会

台 渡 里 2

― 市道常磐 283 号線公共下水道工事に伴う発掘調査報告書（台渡里第 51 次）―

２００９

水戸市教育委員会

ごあいさつ

台渡里官衙遺跡は，那須茶臼岳（なすちゃうすだけ）を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置しております。この遺跡の周辺には，古代常陸国那賀郡の寺院・官衙遺跡である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や県内第３位の規模を誇る前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」などが残されており，古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は，工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため，私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で，埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが，本市においてもその意義や重要性を踏まえ，文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたび計画された公共下水道の新設工事につきましては，遺跡への影響が予想されたため，文化財保護の観点から十分に協議を重ねました。その結果，今回の計画によって，遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り，次善の策として発掘調査を実施し，記録の上での保護措置を講ずることとなりました。

今回の調査により，那賀郡衙に関連する遺構群が確認され，『常陸国風土記』に描かれた当該地域の古代の様子が明らかになるとともに，地域社会の歴史を解明していく上で貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が，かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として，広く御活用いただければ幸いです。

終わりに，本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました周辺住民の皆様，並びに種々の御指導，御助言をいただきました茨城県教育庁文化課の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成21年６月

水戸市教育委員会
教育長　鯨岡 武

例　　言

1　本書は，水戸市道常磐283号線公共下水道工事に伴う台渡里官衙遺跡（台渡里第51次）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，株式会社東京航業研究所の調査支援を受け，水戸市教育委員会が主体となって行った。

3　調査概要及び調査体制は下記の通りである。

所　在　地　水戸市渡里町2699番地先～2775番2地先

調 査 面 積　98.5㎡

調 査 期 間　平成20年4月6日～平成20年5月16日

調 査 主 体　水戸市教育委員会　（教育長　鯨岡　武）

調査担当者　渥美　賢吾（水戸市教育委員会事務局文化財主事）

調 査 支 援　林　邦雄（株式会社東京航業研究所）

調査参加者　榎澤由紀江，海老原四郎，河原井俊吉郎，久保田馨，佐藤佑香，
樋口　碧，廣水一眞

整理参加者　今井千恵，大橋正子，村山彩子

事　務　局

内田　秀泰　　水戸市教育委員会教育次長

中里　誠志郎　　水戸市教育委員会文化振興課長

五上　義隆　　水戸市教育委員会文化振興課長補佐

萩谷　慎一　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係長

緑川　義規　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係主事

関口　慶久　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事

米川　暢敬　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事

金子　千秋　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

4　本書は，渥美・林が分担して執筆し，渥美の助言・指導に基づいて林が編集した。

5　出土遺物及び図面・写真などの記録類は，報告書刊行後一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管する。

6　発掘調査から本書の刊行に至るまで，下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表したい（敬称略・順不同）。

斎藤弘道，佐々木藤雄，田中　裕

東新建設株式会社，茨城県教育庁文化課，文化庁文化財部記念物課

凡　　例

1　本書に記している座標値は，世界測地系に基づく。挿図の内，平面図の方位記号は座標北を，土層堆積断面図の水準線高の数値は海抜標高をそれぞれ示す（単位：m）。

2　土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務所・（財）日本色彩研究所色票監修 2002 年版）に準拠する。

3　遺構平面図及び土層堆積断面図の縮尺は，1/40，1/60，1/80，1/400 を基本とし，各図にスケールを明示した。

4　遺物実測図の縮尺は，1/3，1/4 で掲載し，各図にスケールを明示した。

5　遺物写真の縮尺は実測図と同じである。

6　遺物番号は，実測図，観察表，写真図版とも共通である。

7　挿表中における括弧付き数字については，（　）内が推定値，＜　＞内が残存値・現存値を示す。

8　引用・参考文献は，一括して本文末に収めた。

目　　次

あいさつ　例言　凡例　目次
第１章　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　発掘作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　整理等作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第３節　台渡里遺跡群における既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第３章　調査の方法と成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第３節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第４節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第４章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
写真図版
報告書抄録

挿図・表目次

第１図　台渡里遺跡の位置・・・・・・・・・3
第２図　台渡里官衙遺跡の範囲と
　　　　周辺遺跡の位置・・・・・・・・・・9
第３図　調査区の位置　・・・・・・・・・・13
第４図　基本層序　・・・・・・・・・・・・13
第５図　調査区方眼図　・・・・・・・・・・14
第６図　Ａ区遺構図（１）・・・・・・・・・16
第７図　Ａ区遺構図（２）・・・・・・・・・18
第８図　Ａ区遺構図（３）・・・・・・・・・19
第９図　Ａ区遺構図（４）・・・・・・・・・20
第10図　Ｂ区遺構図　・・・・・・・・・・・22
第11図　Ｃ区遺構図　・・・・・・・・・・・24
第12図　出土遺物　・・・・・・・・・・・・27
第13図　台渡里官衙遺跡で検出された溝の
　　　　想定区画域　・・・・・・・・・・31
第１表　台渡里官衙遺跡と周辺遺跡一覧　・・10
第２表　台渡里遺跡群における既往の調査　・11
第３表　ピット一覧　・・・・・・・・・・・25
第４表　出土土器属性一覧・・・・・・・・・28
第５表　遺物計量表　・・・・・・・・・・・29
第６表　台渡里官衙遺跡第32・41・44・51次
　　　　調査で確認された溝一覧　・・・・・32
第７表　茨城県域所在の豪族居館一覧　・・・32

図版目次

図版１　Ａ区の遺構調査状況（１）
図版２　Ａ区の遺構調査状況（２）
図版３　Ａ・Ｂ区の遺構調査状況
図版４　Ｂ・Ｃ区の遺構調査状況
図版５　出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

文化財保護法第94条第１項に基づき，平成20年６月13日付生整第180号にて，水戸市長加藤浩一（建設部生活道路整備課扱）から「埋蔵文化財発掘の通知について」が水戸市教育委員会（以下，市教委という。）へと提出された。

計画路線である市道常磐283号線（渡里町字前原2699番地先～2775番２地先）は，周知の埋蔵文化財包蔵地「台渡里遺跡（後に台渡里官衙遺跡に名称を変更）」（遺跡番号201-276）に該当している。周辺地域における近年の調査成果によれば，初期官衙とみられる遺構群を囲う方形の区画溝が，当該路線を横断していると考えられた。

こうした成果に基づきつつ，「埋蔵文化財として扱う範囲及び開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基準」（平成12年３月３日付文第162号）の「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」と照合・検討した結果，道路改良工事による側溝新設部分については，原則Ⅰ「工事により埋蔵文化財が掘削され，破壊される場合」もしくは原則Ⅱ（１）「掘削は埋蔵文化財に直接及ばないが，工事により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのある場合」に，道路改良工事による拡幅部分については，原則Ⅲ「恒久的な工作物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ，当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となる場合」に該当するとともに，発掘調査を行う上での安全確保のための一定条件を満たす見込みがあることから，工事着手前に本発掘調査を実施すること，記録保存の措置を講ずる必要があるとの意見を付して，茨城県教育委員会（以下，県教委という。）に進達した。

県教委教育長からは，平成20年10月６日付文第1108号にて，工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので，工事着手前に本発掘調査を実施すること，調査の結果，重要な遺構等が発見された場合には，その保存等について別途協議を要する旨勧告があった。

その後，当該路線は，道路改良工事と公共下水道工事との合冊工事であり，その主管である下水道部下水道工事第１事務所から発掘調査の執行依頼があったことから，市教委は，公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として調査対象の総延長170mのうち，沿線に面する住宅出入口及び交差点等を除く延長135m，面積270㎡を発掘調査の対象とし，平成21年４月６日から平成21年５月16日の期間をもって本発掘調査を実施した。なお調査区内においては，既設水道管等の攪乱が多かったことから，実質調査面積は98.5㎡となった。（渥美）

第２節　発掘作業の経過

発掘調査は，平成21年４月６日から平成21年５月16日まで実施した。調査経過の概略は以下のとおりである。

Ａ区　６日に調査区北側からＡ～Ｃ区のアスファルトを切断後，まずＡ区の表土掘削を開始した。

予想以上に表土が浅くハードローム層まで耕作の攪乱で削平されているうえ，調査区の約半分を南北に貫く水道管による攪乱で壊されている。表土掘削は4月7日まで実施して精査した結果，A区で検出された遺構は溝3条，土坑4基，ピット7基である。8日より北端の溝（1号溝）から遺構掘削を開始し，順次掘り進めていった。なお検出された溝はかなり深いものであったので，安全対策を厳重に行い調査を進めていった。溝を長時間おいておくと安全性の問題が生じる可能性があったため，10日に1号溝，11日に2号溝，13日に3号溝を完掘した。また，16日に基本土層として，調査区の南側で鹿沼土層下まで掘り下げ，土層を確認した。同日に全体の完掘写真と測量を行い，17日にA区の埋め戻しを行った。

B区　5月11日に表土を掘削した。ピット6基が検出されたのみである。12日に遺構の完掘が終了し，写真および測量を行い，13日の午前中に埋め戻しを行った。

C区　13日の午後より表土剥ぎを行った。溝1条とピット1基が検出されたのみである。14日から溝およびピットの掘削を行い，同日掘削および写真撮影を完了した。15日に平面の測量，16日に埋め戻しを行うと共に，機材の撤去や沿線への挨拶等を行い，発掘作業は終了した。（林）

第3節　整理等作業の経過

整理作業は平成21年5月18日より平成21年7月20日までの約2ヶ月にわたって実施した。

5月期には遺物の洗浄・注記・接合作業と平行して，写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。6月期には遺構図面の修正・トレース・遺物の実測・遺物写真の撮影・図版編集・原稿執筆などの作業を行い，7月期は図版編集・原稿執筆などの作業を行い，1日より20日にかけて報告書編集作業を実施した。（林）

第２章　遺跡の位置と環境

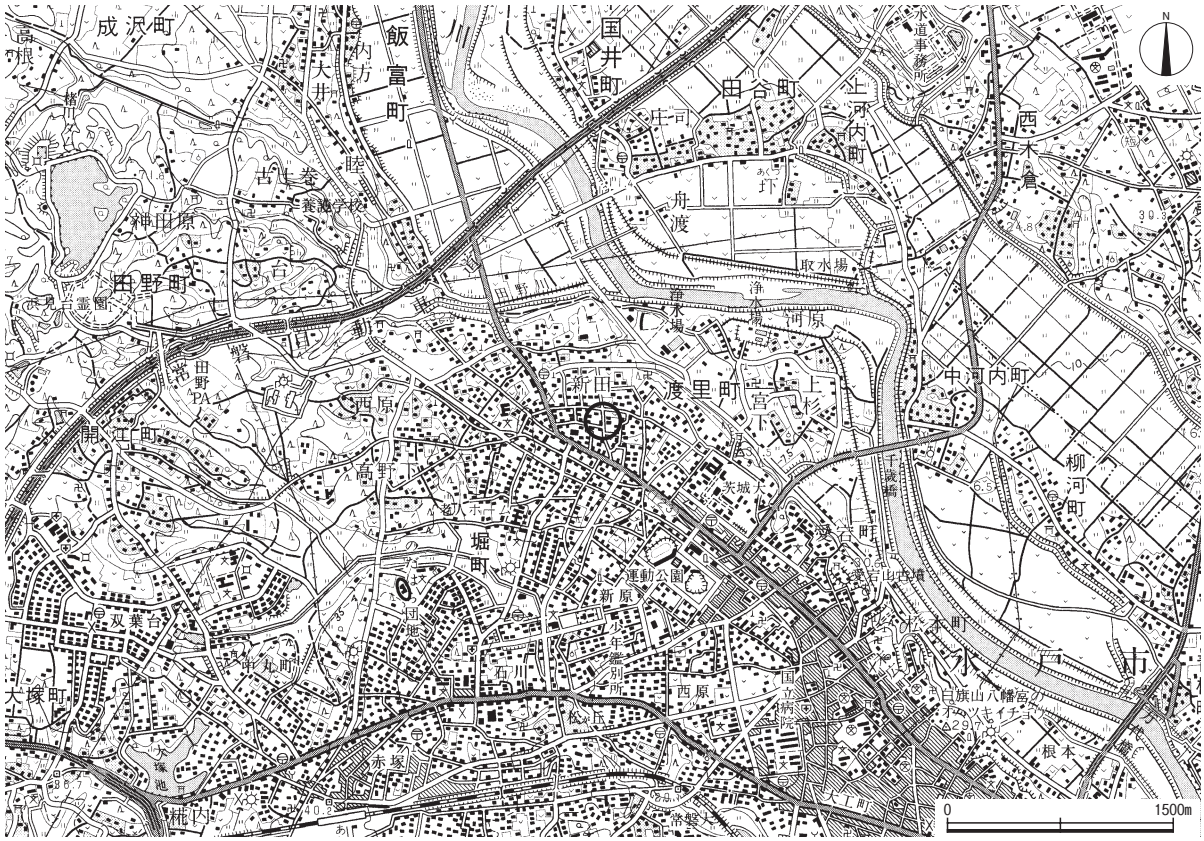
第１節　地理的環境

台渡里官衙遺跡は，茨城県水戸市渡里町字前原 2699 番先～ 2775 番 2 先に所在し，北緯 36 度 24 分 08 秒，東経 140 度 26 分 15 秒（世界測地系）である。

市域の概観　水戸市は，日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。市域の北部には，八溝山地を横切り，鷲子山塊と鶏足山塊とを南北に分ち，西から東へ流れる那珂川とその支流により沖積低地が広がり，これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へとつづき，市域西部を構成している。

その下流域右岸の大半を水戸市域とする那珂川は，栃木県の那須連山を源流として，八溝山地の西縁を南へ流れた後，烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し，今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地の間を太平洋へ向かって流れ出る。この那珂川の存在により，栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが，水上交通により結ばれることから，歴史的に水戸市域が交通の要衝地となることが多かったことが知られる。

市域の地形区分　市域の西部では，標高 300m 以下の低く起伏の小さい丘陵地帯が続く。これらは幅広で丸みを帯びた尾根と谷津田が谷奥まで認められる谷が樹枝状に入り込むのが特徴的で，良好な



第１図　台渡里官衙遺跡の位置　（国土地理院発行 1：50,000「水戸」に加筆）

里山の景観を残している。縄文時代早期から中期にかけてのいわゆるキャンプ・サイトと古代～近世の生産遺跡が分布するのが特徴的である。他方，市域の沖積低地の右岸は左岸に比べて面積が狭小である一方，左岸は那珂川氾濫原の幅が広く，標高 10m 以下の低地帯が広がっており，古くから集落が営まれて現在に至る。これら低地帯に面した台地は，那珂川とその支流によって開析された樹枝状の支谷が深く入り込み，複雑な様相を呈しており，起伏の豊かな地形をなす。東茨城台地のうち水戸市域にあたる部分をとくに水戸台地と呼ぶことがあるが，この支谷によっておもに四つに細分され，北西からそれぞれ上市台地，見和台地，千波台地，吉田台地と呼称される。

台地の地質　水戸台地の地質は，しばしば水戸層と呼ばれる第三紀層（凝灰質泥岩層）を基盤岩とし，その上部に，砂，礫，シルトで構成される見和層，上市礫層が続く。上市礫層は，約 12.5 万年前の最終間氷期最盛期（ステージ 5e）におけるいわゆる下末吉海進からの離水過程で堆積したものである。これらを最下部に赤城水沼テフラ群を伴う火山灰で構成されたいわゆる関東ローム層が被覆し，現在の台地が形成された。

遺跡の周辺　台渡里官衙遺跡は，いわゆる上市台地のうち最も北西に位置する標高約 30m 程度の台地平坦面に立地する。台地に北面して田野川が西から東に流れ，台地の北東縁辺に沿うように流れる那珂川に合流する。この合流地点は，台地の尽きるところにあり，那珂川が大きく蛇行し，南西方向の鹿島灘に向かって流れていくのである。合流地点より東にやや流れが緩やかになる地点があり，近世には渡し場があったと伝えられ，「舟渡」の地名を遺す。古代においては，この延長線上に東海道常陸路が推定されており，同様に渡河点があったと推測される。「渡里」の地名の由来と考えられる。

台地縁辺部から斜面にかけては，風致地区として指定されており，豊かな緑を遺す。斜面を下りきったところには，各所で湧水点が確認されている。『常陸国風土記』那賀郡条では，郡家近傍に「泉に縁りて居める村落の婦女　夏の月に会集ひて布を浣ひ　曝し乾せり」とする場所が存在するとあるが，これまでの調査成果を勘案すれば，那賀郡家は台渡里遺跡周辺と推定されることから，これら湧水点のいずれかであろう。『萬葉集』に詠われた「三栗の　なかに向へる　曝井の　絶えず通はむ　そこに妻もが」（巻九-1745）の曝井が，常陸国那賀郡家の近傍だとされるのもこのためである。現在は愛宕町滝坂に推定されており，渡里町に連綿と続く古代遺跡群と那珂川流域最大規模の前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」との間に位置する。（渥美）

第２節　歴史的環境

台渡里官衙遺跡は，国指定史跡「台渡里廃寺跡」の周辺に広がる官衙・集落等の複合遺跡であり，主として台地平坦面にかけて広がっている。その範囲は東西 800m，南北 500m に及ぶ。昭和 20 年代頃までは，この一帯は山林と畑地が多く，土地利用が緩慢としていたが，昭和 40 年代後半から徐々に宅地化が進み，往時の景観が失われつつある。

先土器時代～縄文時代草創期　軍民坂遺跡からは，長者久保・神子柴文化期の石刃製掻器が採集されている（江幡・吹野 1998）。白石遺跡では橋本編年Ⅱｂ期（橋本 1995，2002）に帰属する頁岩製の角錐状石器や時期不明の削器と剥片（いずれもメノウ製），長者久保・神子柴文化期の尖頭器（頁岩製），

縄文時代草創期の有舌尖頭器（黒曜石製･頁岩製）･石鏃（ガラス質黒色安山岩製･頁岩製）が出土した（樫村 1993）。

台渡里廃寺跡下層からは，3 点の石器が出土している。ひとつは南方地区塔跡の掘り込み地形の基底部直下のローム層から出土したメノウの剥片である。出土層位は第二黒色帯とみられる。もうひとつは，平成 16 年度南方地区第 2 トレンチ（DWT04N-T2）から出土した硬質頁岩製の男女倉型有樋尖頭器である。さらに平成 18 年度長者山地区 1 区トレンチにおいて，確認された正倉院区画溝からもチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が 1 点出土した。技術的・形態的特徴および利用石材から橋本編年Ⅱｃ期Ａグループ（いわゆる「砂川期」）のものと考えられる。また，長者山地区に隣接するアラヤ遺跡では硬質頁岩およびガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器が各 1 点出土した。　（川口）

縄文時代　アラヤ遺跡においては，昭和 26 年の調査で，後期堀之内式，加曽利Ｂ式，後期安行式，晩期安行式，千網式とともに東北地方に分布する大洞式の土器等が出土した（大森 1952c）。

第 1 地点の調査では，遺構が台地縁に密集しており，縄文時代早期の竪穴状遺構 8 基が確認された（井上編 1992）。遺物は早期後葉の茅山下層式，茅山上層式，子母口式，前期前葉の黒浜式，前期後葉の浮島式，中期初頭の五領ヶ台式，中期中葉の阿玉台式，中期末葉の加曽利 E4 式，後期初頭の称名寺式，前葉の堀之内 1 式，後期中葉の加曽利 B2 式土器とともに定角式磨製石斧や磨石，石錘等が出土している。第 2 地点の調査では，磨石や石皿・蜂の巣石，礫器などが出土している（佐々木・川口ほか 2007）。

砂川遺跡からは，加曽利 E3-4 式期の竪穴住居跡 4 軒，加曽利 E4 式期の竪穴住居跡 15 軒，加曽利 E4 式期の土坑 141 基, 加曽利 E4 式期の埋設土器 14 基が検出された（渡辺 1981）。竪穴住居跡は円形，隅丸方形，楕円形で炉の形態には地床炉，石囲い炉，埋設炉があり多様である。

軍民坂遺跡では，第 3 地点において，縄文時代中期後半加曽利 E3 式期の竪穴住居跡が調査され，うち 1 軒は石組複式炉をもつことが明らかとなった。中期後半における東北地方の大木式土器文化圏と非常に密接な交流が推量されよう。

白石遺跡からは，加曽利 E3 式期，加曽利 E4 式期の竪穴住居跡計 3 軒が検出された（樫村 1993）。いずれも円形あるいは不整円形のもので，加曽利 E3 式期のものが地床炉であるのに対し，加曽利 E4 式期のそれの炉は石囲い炉であった。また，遺構外から大木式土器の出土をみた。

弥生時代　弥生時代の遺跡は表採により弥生時代後期土器の存在が確認されたのみである。堀遺跡からは，竪穴住居跡から弥生土器の壺 2 個体が出土したが，土師器の壺と坩が共伴しており，むしろ古墳時代前期初頭とするのがふさわしい（井上・千葉・樫村 1995）。

古墳時代　古墳時代の集落遺跡とされるもののうち時期が判明しているのは，いわゆる五領式段階の土師器が確認された文京 1 丁目遺跡，堀遺跡，中河内遺跡の 4 遺跡，いわゆる鬼高式段階の土師器が出土した塚宮遺跡や白石遺跡に限られる。白石遺跡では，3 軒の竪穴住居跡が確認されたが，いずれも鬼高式の最終段階の土師器を伴っており，7 世紀前半代と考えられる（樫村 1993）。

当該地域での造墓活動は活発であった。愛宕山古墳は，全長 136.5m を測り，楯形の周隍を巡らす大型前方後円墳である。その墳形から中期古墳とみられ，表面採集された埴輪に黒斑が見られることから（井・小宮山 1999），5 世紀前半の築造と考えて大過ない。近傍には，かつて姫塚古墳と呼ばれる

全長 58m 程の前方後円墳があったが，1971 年に宅地造成のため破壊されてしまった。有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられ，盗掘孔の状況から粘土槨であったと推定される（藤村・塩谷 1982）。愛宕山古墳に近い時期が推定されている（井・小宮山 1999）。

後期には，富士山古墳群，小原内古墳群が該当する。円筒埴輪や形象埴輪，直刀，鉄鏃などが出土したとされる。いずれも 6 世紀代であろう。終末期では，西原古墳群がある。これは，凝灰岩の横穴式石室をもつ古墳，須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄鏃などが出土したという古墳（大森 1952a，1952b），埴輪を持たない古墳があるとの報告から，終末期の群集墳であるとの見方があった。しかし平成 17 年度の試掘・確認調査で墳丘が削平された円墳の周隍が検出され，埴輪片が多数出土した。終末期に限らず長期にわたって断続的に造墓活動が展開された古墳群とみられる。

那珂川を挟んで対岸には白石古墳群がある。5 基の円墳から構成され，2 号墳の墳頂には凝灰岩片が散乱しており，横穴式石室の存在が想定される。また 3 号墳の南側からは石棺が検出されており，いずれも埴輪を伴っていないことから，終末期の群集墳と考えられる。

白石古墳群の北西には権現山横穴群が所在する。1 号墓及び 2 号墓の玄室には線刻壁画が認められる。1 号墓玄室の左右側壁に放射状線文が，2 号墓玄室の左右側壁に稲妻形文・縦線・横線・建物・冑が，それぞれ描かれている。3 号墓からはガラス製小玉と水晶製切子玉が，4 号墓からはガラス製丸玉と金環 2 点が，それぞれ出土している。造墓年代は 7 世紀前葉とする見解（大森 1974，生田目・稲田 2002）と 8 世紀前後とする見解（川崎 1982）とがあり，一致をみない。

奈良・平安時代　台渡里官衙遺跡及び台渡里廃寺跡については，既往の調査として後述することとし，ここではその周辺に展開する古代遺跡を概観しておく。

アラヤ遺跡第 1 地点では，7 世紀末～ 8 世紀初頭の工房跡や古代の竪穴住居跡から刀子や砥石などが一定量出土しており，寺院や官衙の造営に関わっていた可能性が高い。また 9 世紀代とみられる掘立柱建物跡があることから，土地利用の変化にも注意したい（井上編 1992）。第 2 地点では，1 区において東西方向の区画溝が確認され，覆土から炭化米が出土したことから那賀郡衙正倉院の区画溝とみられる。また 4 区では柱間 7 尺の掘立柱建物跡も確認された（佐々木・川口ほか 2007）。

堀遺跡第 1 地点では，9 世紀代の竪穴住居跡とともに，規模の異なる 3 棟の側柱掘立柱建物跡が検出された（伊藤 1995）。第 2 地点では，竪穴住居跡・掘立柱建物跡から構成される大規模な古代集落跡が確認された。最も隆盛するのは，8 世紀後半から 9 世紀にかけてである。特筆されるのは，刀子・鎌・鏃・釣針・釘・錠などの鉄製品や須恵器壺 G など特殊な器種の土器の出土である。土坑から出土した人面墨書の土師器小甕とあわせて，この集落の特異性をよく表している（井上・千葉・樫村 1995）。なお，5 号掘立柱建物跡は長舎風の建物跡で 9 世紀代の公的建物の可能性があることからも（樫村 2005），当該集落は，那賀郡衙の造営や修造などに関わった計画村落である可能性が指摘できよう。

また台渡里官衙遺跡を中心に堀遺跡と対になる位置には，渡里町遺跡が所在する。第 5 地点では，7 世紀末から 9 世紀中葉までの竪穴住居跡が検出されているが，灰釉陶器と瓦が出土している点については，官衙隣接集落としての特徴をよく表している（佐々木・林ほか 2008b）。

砂川遺跡においても，竪穴住居跡から構成される古代集落が確認された。鉄製品のほか土製紡錘車などの生産用具が出土した。また井戸跡からは曲物，櫛，高台付盤などの木製品が出土している。（渡

辺 1981)。

白石遺跡からは，古代の竪穴住居跡，掘立柱建物跡，建物基壇が検出され，官衙関連遺跡として注目された。とくに，8 世紀前半に帰属するとみられる桁行 36 間×梁間 2 間の規模をもつⅡ区 2 号掘立柱建物跡は，並行する 1 号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。(樫村 1993a)。

白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡では，台渡里廃寺跡長者山地区と同様の文字瓦をはじめとした瓦の出土が多数みられた。「百壇」という地名を遺す周辺には，3 棟の礎石建物跡の存在が報告されている（伊東 1975)。黒澤彰哉の指摘する通り，本遺跡を新置の河内駅家跡とするならば（黒澤 1998)，白石遺跡Ⅱ区 2 号掘立柱建物跡は，樫村のいうような駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設として理解することができる（樫村 1993b)。なお，この建物跡を馬房とする見解については木本雅康も支持するところであるが，『延喜式』には駅馬数が 2 疋とあり，養老 2 年（718）の石城国設置に伴って駅馬数 10 疋が置かれたと仮定しても，建物の規模とには隔たりがあることから，木本が騎兵のための馬房としてみることで駅家の軍事的側面を強調した点は興味深いものである（木本　2008)。

中世～近世　長者山城跡は，春秋氏の居城と伝えられるが憶測の域を出ず，これまで縄張り図などの作成はあったが，十分な調査成果が蓄積されてきたとはいい難い。ただし近年の調査では，現在遺る土塁・堀の外側で，15 世紀後半～ 16 世紀初頭の土器群の出土する地下式坑や井戸跡，土坑・ピット多数が検出され，少しずつ中世城館の構造を明らかにし得る資料が蓄積されつつある。また同時期の遺構として，近接する昭和 48 年の台渡里第 7 次調査やアラヤ遺跡第 2 地点において瓦礫道が検出され，城館との関係が注目される。

渡里町遺跡第 5 地点でも，中世後期の土坑(地下式坑含む)が検出され，古瀬戸の灰釉卸皿が出土した。隣接する勝憧寺が長者山城主の菩提寺と伝わるが，こうした遺構はそれに関連するとみられ，今後の調査に期待がかかる（佐々木・林 b2008 ほか)。

古代寺院跡である台渡里廃寺跡内においても，第 8 次調査における 1 号井戸跡から 15 世紀～ 16 世紀初頭のかわらけや内耳土器，擂鉢などが出土（井上・千葉 1995)，第 18 次調査では，土塁に沿う形で観音堂山地区寺院建物の礎石を落とし込んだ溝跡が確認され，かわらけや内耳土器などが出土した。これらのことから，古代寺院の伽藍地が城館の一角として機能していたと推定される。

他方，第 19 次調査では，南方地区塔跡基壇を塚として再利用している様子がうかがえ，五輪塔部材や板碑片，北宋銭を伴う中世火葬墓が集中して営まれていたことが明らかとなった（川口・小松崎・新垣ほか 2005)。

第 8 次調査のうちでも台渡里官衙遺跡の範囲に含まれる第 2 調査区では，近世墓として 4 基の白色粘土敷きの遺構が確認されている。同じく台渡里官衙遺跡の範囲である第 17・26 次調査では，井戸跡から 15 世紀後半から 16 世紀前半のかわらけと内耳土鍋の出土がみられ，長者山城跡に関連する遺構群は，かなり広範囲に展開していることが明らかとなった。

第 25 次調査では，2 区から拳大の円礫による集石遺構が検出され，17 世紀前半の瀬戸・美濃や波佐見碗，17 世紀後半の瀬戸・美濃大鉢，18 世紀前半の肥前系磁器碗が出土した。また 4 区では，攪乱土中から，かわらけとともに益子土瓶や土人形が出土しており（佐々木・川口・大橋ほか 2006)，17 世紀前半頃には近世村落の形成があったものとみられる。（渥美）

第３節　台渡里遺跡群における既往の調査

ここでは，台渡里官衙遺跡を理解する上で欠かせない台渡里廃寺跡とともに，その調査成果を一体的に概略することで，古代の官衙・寺院遺跡の様相を中心についてふりかえっておきたい。

１　寺院と郡衙正倉院の調査（台渡里廃寺跡）

台渡里廃寺跡の調査研究は，髙井悌三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする（髙井 1964）。これを受けて，昭和 20 年にその一部が茨城県指定史跡とされた。

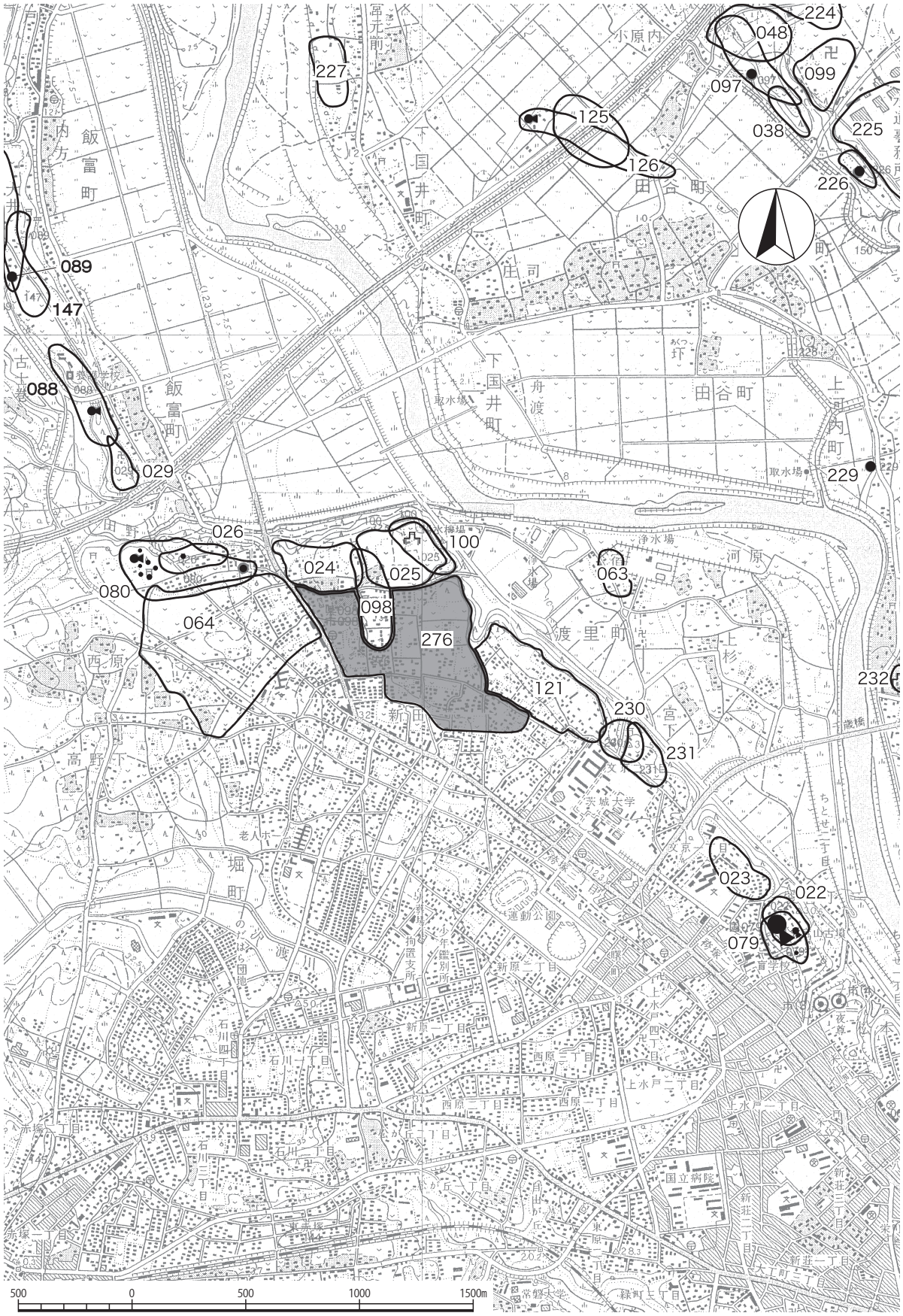
長者山地区については，従来から炭化米の出土が報告され，礎石建物跡が確認されていることから（髙井 1964，瓦吹 1991），那賀郡衙正倉院と推定された（瓦吹 1991，黒澤 1998）。近年行っている市教委の範囲確認調査により，新たに 9 棟の礎石建物跡と四方を台形状に囲む区画溝が確認され，正倉院であることが確定的になった（川口・渥美・木本 2009）。

観音堂山地区については，これまで郡衙政庁院や河内駅家とする見解もあったが（瓦吹 1991，外山 1993），市教委が行った範囲確認調査により，寺院建築とみられる礎石建物跡に伴って，陶製相輪の一部や塑像片，須恵器高坏形香炉等の仏教関連遺物の出土をみたことから，いわゆる郡衙周辺寺院であると推定されるに至った。そして創建年代は 7 世紀後半に遡ることが明らかとなった（川口・小松崎ほか 2005）。出土瓦には，「吉（土）田」，「川邊」，「井野」，「阿波」，「中」，「志□」，「年足」等寺院造営に関与した那賀郡の郷名や人名が記されたもの，相輪の一部が描かれたものや「佛」銘をもつもの等が確認された。

南方地区については，早くから寺院と考えられてきたが（髙井 1964，瓦吹 1991，黒澤 1998），市教育委員会が行った範囲確認調査により，塔跡基壇の内部よりいわゆる内黒土器の坏破片が出土したことから，9 世紀後半に造営された寺院跡であることが判明した。観音堂山地区の寺院が 9 世紀には火災で廃絶していることに加え，南方地区の伽藍区画と思しき溝の掘削が中途で廃絶されていることから，観音堂山伽藍焼亡後に南方地区において再建が開始されたが，造営は何らかの事情により中断した可能性が高い（川口・小松崎ほか 2005）。なお平成 17 年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

２　官衙関連遺跡の調査（台渡里官衙遺跡）

渡里町の台地を東西に貫く都市計画道路敷設に伴い実施された発掘調査（第 8 次調査）では，第 2 調査区において，竪穴住居跡，溝跡，掘立柱建物跡が検出された（井上・千葉 1995）。とくに竪穴住居跡や 2 号溝から集中的に出土した 7 世紀後半～ 8 世紀前半の土器群が注目され，それらのうちには，湖西産や上野系等搬入品とみられる須恵器や東北地方の栗囲式の影響を受けているとみられる土師器坏などがみられる。また 3 号溝は，0.9 ～ 1.3m ほどの掘方を持つ柱穴が 2m 等間で列状となったものが，溝で連結しており，柵列もしくは掘立柱塀などの区画施設としての性格が推定される。遺構には，主軸が真北を示す傾向にあるものとやや北西に振れる傾向のものと 2 種あり，8 世紀前半代のいずれかを画期とした時期差と考えられる。第 9 次調査は，第 8 次調査の第 2 調査区に隣接しており，3 号



第２図　台渡里官衙遺跡の範囲と周辺遺跡の位置　（茨城県遺跡地図１：25,000「水戸」に加筆）

第１表　台渡里官衙遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・石斧・石錘・土偶，弥生土器（後），土師器・須恵器（古）	
23	文京１丁目遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・石斧・石剣・土偶，弥生土器（後），土師器（古前），須恵器（奈・平）	
24	アラヤ遺跡	集落跡	尖頭器（先），縄文土器（早～晩）・石斧・石剣・土偶，土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器（早～後），弥生土器（後），土師器（古・奈・平）	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器（早～後），土師器（奈・平），須恵器（奈・平）	
37	阿川遺跡	集落跡	縄文土器（中～後），土師器（古），土師器（奈・平）	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器（早～後），弥生土器（後），土師器（古前・後）	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器（前），弥生土器（後），土師器（古前・後）	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器（中～晩）・石錘・土偶，弥生土器（後），土師器（古），須恵器	
46	軍民坂遺跡	集落跡	掻器（先），縄文土器（前～後）・土器片錘・石製品，弥生土器（後），土師器・須恵器（奈・平）	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古），須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器（中～後），弥生土器（後），土師器（古・奈・平）	
63	圷渡里遺跡	集落跡	土師器・須恵器（古・奈・平）	
64	堀遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古前・奈・平），須恵器・灰釉陶器・紡錘車・砥石・鉄鎌・鉄鏃・刀子・釘・瓦（奈・平），内耳土器・土師質土器・常滑焼・擂鉢・石臼（中），瓦質土器・磁器（近）	
65	中河内遺跡	集落跡	古墳（前），土師器（奈・平）	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀（古）	方円１（2），円墳１（2）
80	西原古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄族（古）	方円１，円墳８（11）
94	権現山古墳群	古墳群		円１（2）
95	権現山横穴群	横穴群	土師器・須恵器・水晶製切子玉・ガラス製小玉（古）	横穴（4）
96	富士山古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・人物埴輪（古）	方円１（?），円８
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀（古）	方円１，円２（4）
98	台渡里廃寺跡	寺院跡 官衙跡	ナイフ形石器・男女倉型有樋尖頭器・剥片（先），縄文土器（前・後～晩）・石器，弥生土器（後），土師器・須恵器・墨書土器・瓦・文字瓦・瓦塔・陶製相輪・金箔製品・鉄釘・鎹・青銅製品・鉄滓・羽口（奈・平），土師質土器（中）・内耳土器（中）	
99	田谷廃寺跡	官衙跡	土師器・須恵器・瓦・文字瓦（奈・平）	
100	長者山城跡	城館跡		
121	渡里町遺跡	城館跡	縄文土器（早・中・後），土師器（古・奈・平），須恵器・灰釉陶器（奈・平）	
125	塚宮遺跡	集落跡	縄文土器（中・後），弥生土器（後），土師器（古前・後）	
126	塚宮古墳群	古墳群		方円（1），円（2）。
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器（中・後），土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦（奈・平）	
225	白石遺跡	城館跡 集落跡	角錐状石器（先）・削器（先），尖頭器（草創）・有舌尖頭器（草創）・石鏃（草創），縄文土器（中），弥生土器（後），土師器・須恵器（古・奈・平），内耳土器（中）・陶器（中）・磁器（中）	
226	白石古墳群	古墳群		円５
227	宮元遺跡	集落跡	土師器（古前）	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器・須恵器（奈・平）	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円（1）
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器（後），土師器（古），陶器	円１（3）
231	文京２丁目遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	
232	中河内館跡	城館跡		
276	台渡里官衙遺跡	集落跡	縄文土器（晩），土師器・須恵器（古・奈・平），鉄製刀子（古）・鉄製鎌（古）・砥石（古），墨書土器・炭化米・瓦（奈・平），内耳土器（中），陶器・磁器・銅銭・銅箸・砥石（近）	

『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成 10 年度版）』に加筆

溝の延長部分と７世紀後半の竪穴住居跡が１軒検出された。

第８・９次調査区の南側に位置する市道路内での発掘調査では（第 39 次），８次２区で検出された３間×３間の布掘り総柱掘立柱建物跡とほぼ同じものが検出されると同時に，これと軸を同じくする官衙ブロックを区画するとみられる溝の発見があった。溝からは「郡厨」銘墨書土師器有台坏が出土し，官衙ブロックの一部である可能性を一層におわせている（佐々木・林 2008a ほか）。

平成 15・17 年に実施された商業施設建設に伴う調査（第 17 次・第 26 次）では，台渡里廃寺跡南方地区伽藍の東側寺院地区画溝とともに，寺院に先行する竪穴住居跡や掘立柱建物群と鍛冶工房等が確認された。これらは観音堂山地区の造営時期に相当することから，寺院造営に関わったものとみられる（川口・関口ほか 2007）。

第２表　台渡里遺跡群における既往の調査

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査機関	面積（㎡）	文献	概要	遺物（特記事項）
第30次	2006.10.3 ～ 2007.2.7	台渡里廃寺跡／長者山地区	渡里町字長者山3119番地ほか	重要遺跡範囲確認	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委（確認調査）	386.77	水戸市教委2009『第21集』	郡家正倉。	
第31次	2006.11.29	台渡里遺跡／南方地区	渡里町字南前原2618	個人住宅造成に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委（試掘調査）	12.60	水戸市教委2009『第22集』	時期不明の遺構。	
第32次	2007.1.31	台渡里遺跡／南方官衙地区	渡里町字狸久保2771-1番地外	宅地造成に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委（試掘調査）	30.4	水戸市教委2009『第22集』	中世以降とみられる堀跡を確認。	
第33次	2007.01.22 ～ 2007.02.20	アラヤ遺跡（第２地点）	渡里町字アラヤ3061-4地先	市道常磐10号線改良工事に伴う	大橋　生 林　邦雄	東京航業研究所（本調査）	244.0	水戸市教委2007『第12集』	長者山地区の南側区画溝と思われる溝跡，第７次調査で確認された中世の瓦礫道の延長部分を調査。	
	2006.1.27 ～ 2006.1.28			市道常磐10号線改良工事に伴う	新垣清貴 関口慶久	水戸市教委（立会調査）	—	水戸市教委2007『第12集』	溝跡２条を確認。	
第34次	2007.04.04 ～ 2007.06.18	台渡里遺跡／東方官衙地区	渡里町字宿屋敷3028-8	個人住宅造成に伴う	川口武彦 渥美賢吾 木本挙周	水戸市教委（発掘調査）	98.24		東方官衙域の「溝もち」掘立柱建物跡１，竪穴建物跡１を確認。	
第35次	2007.05	台渡里遺跡／東方官衙地区	渡里町 2812-1～3011	下水道新設に伴う	新垣清貴	水戸市教委（試掘調査）	18.0		＊第３９次に向けた試掘調査	
第36次	2007.08.19	台渡里廃寺跡／観音堂山地区 台渡里遺跡／東方官衙地区	渡里町アラヤ前2967-1 渡里町宿屋敷3017-1	ソイルマーク確認に伴う	西村　康 西口和彦 金田明大 木本挙周 渥美賢吾	水戸市教委 奈文研（レーダー探査）	—			
第37次	2007.10.29	台渡里遺跡／東方官衙地区	渡里町字宿屋敷3028-6	土地改良に伴う	木本挙周	水戸市教委（確認調査）	10.0		掘立柱建物跡の柱穴を断面で確認。	
第38次	2007.11 ～ 2008.2.12	台渡里廃寺跡／長者山地区	渡里町 3088-2	重要遺跡範囲確認	渥美賢吾 木本挙周	水戸市教委（確認調査）	420.0		長者山地区の南側区画溝を確認。その他では，７世紀後半の竪穴住居跡，８世紀前半の区画溝，掘立柱建物跡等を確認。	
第39次	2007.11.19 ～ 2008.1.19	台渡里遺跡／東方官衙地区	渡里町 2812-1～3011	下水道新設に伴う	大橋　生 市瀬俊一	東京航業研究所（本調査）	226.0	水戸市教委2008『第15集』	７世紀後半の竪穴住居跡、８世紀前葉の掘立柱建物跡、８世紀後葉～９世紀前葉の溝跡３条を確認。	「郡厨」と釈読できる墨書土器。
第40次	2008.03.19	台渡里遺跡／南方官衙地区	渡里町字狸久保2771-12番地	個人住宅造成に伴う	川口武彦	水戸市教委（試掘調査）	24.7		上面幅6.0m，深さ2.5m以上の堀跡を確認。	
第41次	2008.04.30 ～ 2008.06.04	官衙遺跡／南前原地区	渡里町字狸久保2771-12	個人住宅建築	川口武彦 色川順子	市教委（本調査）	90.22		40次の本調査・初期官衙区画溝。掘立柱塀を伴う。	
第42次	2008.05.19 ～ 2008.05.23	官衙遺跡／長者山地区	渡里町 3078-2，3082-1，3090-1，-4，-7，3095-3，3145-1，-2，3146	重要遺跡範囲確認調査	川口武彦 西村　康 西口和彦 金田　明 大木本挙周 三井　猛	市教委 奈文研（レーダー探査）	7,700	市教委2011『第37集』	調査区６では正倉院の東限を区画するとみられる溝跡を確認。また，その南東では40ｍ四方の官衙ブロックとみられる区画溝を確認。調査区７では，法倉とみられるSB001が８×３間の壺地業から７×３間の布地業に建て替えられていることを確認。	
第43次	2008.07.10	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町 3009-1	個人住宅建築	渥美賢吾	市教委（試掘調査）	58.3		南北方向に主軸をとる幅２ｍ以上の区画溝SD01，北西方向から南東方向に走る溝状遺構SD02（柵列ヵ），SD02と切り合う溝状遺構SD03，SD04を確認。	SD02の覆土上面からは3121型式軒丸瓦の完形品が出土。
第44次-①	2008.08.24 ～ 2008.09.13	官衙遺跡／南前原地区	渡里町字前原2839-1	学術調査	田中　裕 佐藤祐香	茨城大学考古学研究室	109		テニスコート。41次検出の大溝の確認。41次調査で確認されていた溝の北側部分を確認。また，正倉とみられる礎石建物跡も１棟確認。	
第44次-②	2009.08.01 ～ 2009.09.17	官衙遺跡／南前原地区	渡里町字前原2839-1	学術調査	田中　裕 佐藤祐香	茨城大学考古学研究室				

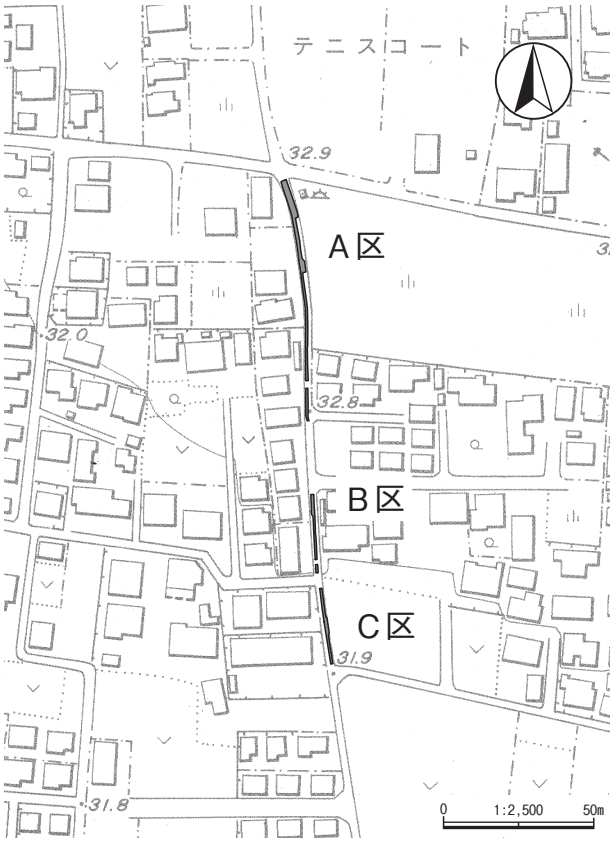
調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査機関	面積（㎡）	文献	概要	遺物（特記事項）
第45次-①	2008.07.22	官衙遺跡／南前原地区	渡里町 2491 －21 地先～ 2537 －3 地先	常磐 33 号線道路改良工事	渥美賢吾 関口慶久	市教委（立会調査）	—		掘立柱建物跡の柱穴２基を断面で確認。	
第45次-②	2009.06.03	官衙遺跡／南前原地区	渡里町 2491-21 地先～ 2537-3 地先	常磐 33 号線道路改良工事	渥美賢吾 米川暢敬	市教委（立会調査）	—		ピット２基，イモ穴２基	
第46次	2008.08.21～2008.08.26	官衙遺跡／宿屋敷北地区（長者山遺跡第３地点）	渡里町字長者山 3151-4，-6	個人住宅解体	川口武彦	市教委（確認調査）	90.75		解体工事に伴う確認調査。	
第47次	2008.10.09	官衙遺跡／宿屋敷地区	里町字宿屋敷 2987 － 4，-14	共同住宅建築	渥美賢吾	市教委（試掘調査）	26		掘立柱建物，竪穴住居跡。	
第48次	2008.10.21～2009.03.27	官衙遺跡／長者山地区	渡里町字長者山 3147 ほか	重要遺跡範囲確認調査	川口武彦	市教委（確認調査）	530	市教委 2011『第 37 集』	小２つの区画溝東辺の確認。	
第49次	2008.10.31	官衙遺跡／長者山地区	渡里町字長者山 3058-3	個人住宅建築	渥美賢吾	市教委（試掘調査）	8.24		遺構は確認されず。	
第50次	2008.12.03	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町 3001-3	個人住宅解体	川口武彦	市教委（試掘調査）	11.54		遺構は確認されず。	
第51次	2009.04.06～2009.05.16	官衙遺跡／南前原地区	渡里町字前原 2699 地先～ 2775-2 地先	常磐 283 号線公共下水道新設工事	渥美賢吾	東京航業研究所（本調査）	98.5	市教委 2009『第 30 集』	初期官衙の区画溝。	

これらの調査地点よりやや南方で行われた第 24 次調査では，古代の竪穴住居跡とともに総地業の礎石建物跡１棟とそれを区画する溝１条が検出され，区画溝の覆土上層からは炭化米がまとまって出土した（小川・大渕 2006）。SI01 からは「備所」銘墨書をもつ須恵器有台坏が出土した。狭小な調査区ゆえに拙速な判断は控えたいが，炭化米や礎石建物跡の存在から類推するならば，租税等を備蓄しておくための施設名を示すと解することも可能であろう。

こうした近年の調査により，古代那賀郡衙及びそれに関連する遺構群は，台渡里廃寺跡の範囲のみならず，台渡里官衙遺跡の範囲にも及ぶことが確認されており，現在改めて遺跡範囲の括り方に対する見直しの必要性に迫られている。（渥美）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

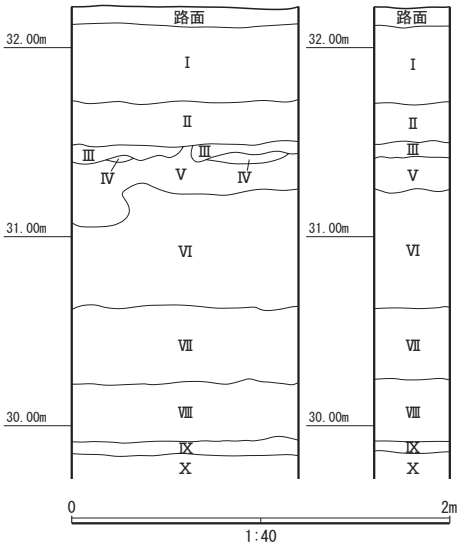


第３図　調査区の位置

発掘調査は，幅2.0ｍほどの南北に伸びる細長い市道を周辺住民の交通路を確保するため３ヶ所に分け，Ａ～Ｃ区の調査範囲を設定した（第３図）。調査では公共座標を基準に，随所に基準点を設け，その既知点より光波測量器を使用して遺物取上げなどの記録作業を行った。

調査区の掘り下げはアスファルト舗装を除去後，重機により砕石・表土層を掘削し，その下部より遺構確認面までは主として人力で掘り下げた。遺構実測については，デジタルカメラによる写真測量を行った。遺物は原則として包含層および遺構内出土遺物については全点３次元で記録した。写真撮影は35㎜モノクロフィルム，35㎜カラーリバーサル，デジタルカメラ（1,280万画素）を使用して適宜，記録撮影を行った。　（林）

第２節　基本層序



第４図　基本層序

Ａ区南側に基本土層確認のためのテストピットを設け，観察作業を行った。基本層序は以下の通りである（第４図）。

Ⅰ層　路盤および耕作土層

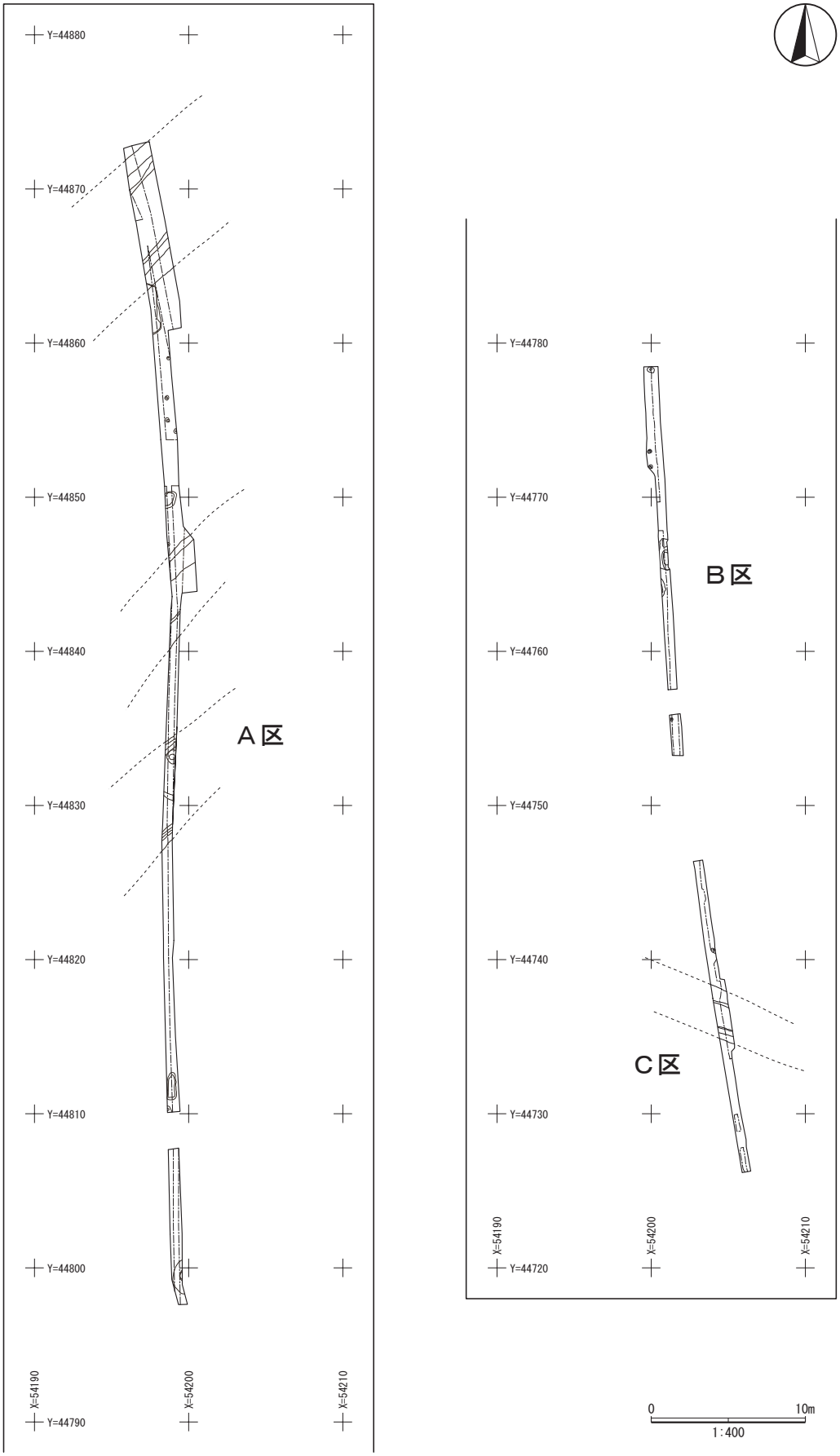
Ⅱ層　10YR2/3　黒褐色土層　粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。

Ⅲ層　10YR3/4　暗褐色土層　粘性はやや欠け，締まる。七本桜軽石層。

Ⅳ層　10YR5/6　黄褐色土層　粘性はやや欠け，締まる。今市軽石層。

Ⅴ層　10YR6/8　明黄褐色土層　粘性をもち，やや締まりに欠ける。赤・白色粒子を微量含む（ソフトローム）。

Ⅵ層　10YR6/8　明黄褐色土層　粘性をもち，締まる。赤･白･


Y=44880
Y=44870
Y=44860
Y=44850
Y=44840
Y=44830
Y=44820
Y=44810
Y=44800
Y=44790
X=54190
X=54200
X=54210
A区
Y=44780
Y=44770
Y=44760
Y=44750
Y=44740
Y=44730
Y=44720
B区
C区
0
10m
1:400

第５図　調査区方眼図

黒色粒子を少量含む（ハードローム）。

Ⅶ層　10YR6/6　明黄褐色土層　粘性をもち，締まる。赤・白色粒子・鹿沼土を少量含む。

Ⅷ層　10YR8/6　黄橙色土層　粘性に欠け，やや締まる。鹿沼土層。

Ⅸ層　10YR4/4　褐色土層　粘性をもち，締まる。鹿沼土を少量含む。

Ⅹ層　10YR8/2　灰白色土層　粘土層。

第３節　遺構

Ａ～Ｃ区の調査区は那珂川南岸より南西へ約 700 ｍの台地上に位置する。近隣では平成 20 年度に個人住宅建設に伴う発掘調査（第 41 次），同年度に茨城大学による発掘調査（第 44 次「茨大運動場地点」）が実施されている。これまでの調査で北東方向から南西方向の軸から 90° 屈曲して北西方向から南東方向に向かう軸を持つ溝が検出されていることから，今回の調査でも，同様の区画溝等が検出されることが期待された。

以下では，各調査区で検出された遺構について説明する。なお，小ピットについては配列に明瞭な規則性が認められないため，一括して一覧（第３表）として掲載したので，そちらを参照願いたい。

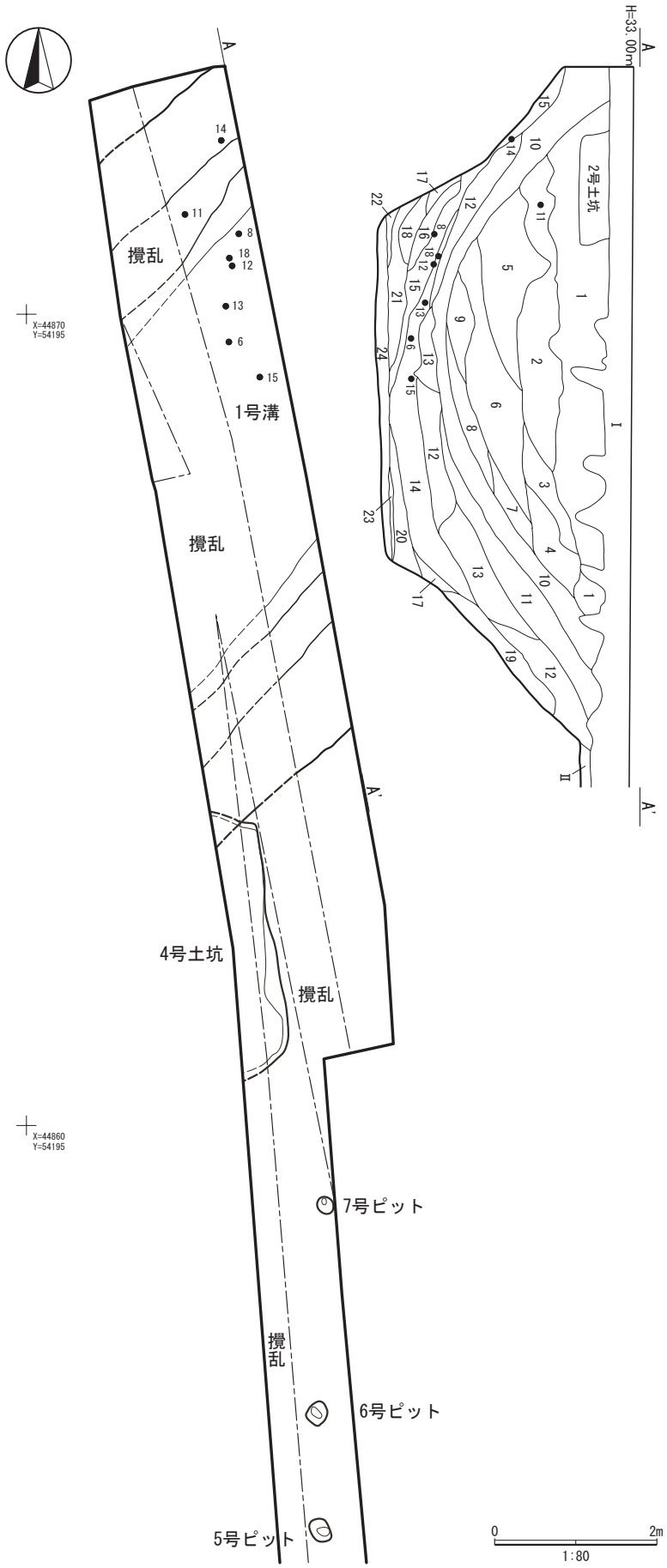
（１）Ａ区の遺構

長さ約 62 ｍ，幅 0.6 ～ 2.0 ｍの南北に細長い調査区で，水道管が調査区の東側を中心に縦断していることから，この部分は調査はできなかった。道路面から遺構の確認面であるソフトローム上面までの深さは約 0.3 ～ 0.6 ｍ，標高は 32.1 ～ 32.3 ｍを測る。

遺構としては，溝が３条，土坑が４基，ピットが８基検出された。この３条の溝は軸をほぼ同一にする。遺物は縄文時代中期加曽利Ｅ４式から後期称名寺式と思われる土器や古墳時代終末期から奈良時代前半期にかけての土師器坏・甕・壺や須恵器坏・蓋等が出土している。

１号溝（第６図，写真図版 1）

南西から北東方向にほぼ直進しているが，西側を水道管埋設によって大きく攪乱されている。確認部分の全長は 100 ㎝，上面幅約 740 ㎝，底面幅約 370 ㎝，深さは遺構確認面より約 240 ㎝を測る。主軸の方向はＮ－ 50°－Ｅを示す。断面形は逆台形状を呈し，壁面の中～下位でやや角度が変わる。底面の標高は約 29.8 ｍを測り，ほぼ平坦である。下層付近は自然の堆積状況を示す。上面はロームブロックが多く混じる土で，人為的に埋め戻した状況を示す。また，底面が約 10 ㎝の厚さでロームブロックや粘土ブロックを用いて硬化させているが（24 層），その上面がほぼ同一の高さになるため意図的に突き固めた可能性が高い。これは第 41 次調査で確認された溝底面と類似する。出土遺物は縄文時代中期の加曽利Ｅ４式土器が８点，古墳時代終末期から奈良時代前半期を中心とした須恵器片が７点，土師器片が 90 点出土している。このうち 15 点が図示し得た（6 ～ 20）。土師器・須恵器は溝の下層である黒色土層中から中心に出土している状況から，古墳時代終末期から奈良時代前半期を中心とした時期までは自然に，その後，人為的に埋められた可能性が高い。なお，１号溝から南へ約 17 ｍに２号溝が存在する。



1号溝

1	10YR5/6黄褐色土層	粘性をもち，やや締まる。白色粒子・ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロック・黒色土を少量含む。
2	10YR4/4褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。白色粒子・ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロック・黒色土を多量に含む。
3	10YR4/6褐色土層	粘性をもち，やや締まる。白色粒子・ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロック・黒色土ブロックを少量含む。
4	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。白色粒子・ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロック・黒色土ブロックを少量含む。
5	10YR6/8明黄褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。白色粒子・ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロック・黒色土を少量含む。
6	10YR4/6褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ロームブロック・黒色土ブロックを多量に，ローム土・鹿沼土ブロック・粘土ブロックを少量含む。
7	10YR4/6褐色土層	粘性をもち，やや締まる。白色粒子・ロームブロックを少量，黒色土ブロックを微量含む。
8	10YR4/6褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロックを多量に含む。
9	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ロームブロックを多量に含む。
10	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ローム土・ローム粒・黒色土を多量に含む。
11	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。白色粒子・ローム粒・黒色土・黒色土ブロックを多量に，ローム土を少量含む。
12	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を多量に，白色粒子を少量含む。
13	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量，鹿沼土ブロック・黒色土ブロックを微量含む。
14	10YR2/1黒色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒・ロームブロックを少量含む。
15	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム土を多量に含む。
16	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ローム粒を微量含む。
17	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ローム粒・鹿沼土粒を少量含む。
18	10YR4/4褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ローム粒を少量含む。
19	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム土・ローム粒を少量含む。
20	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒を多量に，鹿沼土ブロック・粘土ブロックを少量含む。
21	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ローム粒を少量含む。
22	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ローム粒・鹿沼土粒を少量含む。
23	10YR2/1黒色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
24	10YR4/6褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロック・鹿沼土ブロック・粘土ブロックを多量に，黒色土を少量含む。

第６図　Ａ区遺構図（１）

２号溝（第７図，写真図版２）

調査区の南西から北東にかけてほぼ直進しているが，東側および中央部が水道管埋設によって大きく攪乱されている。確認部分の全長は50㎝，上面幅約410㎝，底面幅約200㎝，深さは確認面より約200㎝を測る。主軸の方向はＮ－44°－Ｅを示す。断面形は逆台形状を呈し，壁面の中位でわずかに角度を変える。底面の標高は約30.2ｍを測り，ほぼ平坦である。覆土は中～下層付近が自然の堆積で，その後ロームブロックが多く混じる土で人為的に埋め戻した状況を示す。また，１号溝と違い底面の硬化は確認されなかった。出土遺物は，古墳時代終末期から奈良時代前半期の土師器片が１点出土しているが小片のため図示できなかった。また，溝内の水道管埋設による攪乱土中より須恵器丸底坏が２点出土している（21）。帰属年代は，遺物や埋没状況，覆土の状況から１号溝とほぼ同時期であったと考えられる。なお，北へ約17ｍに１号溝，南に約６ｍに３号溝が存在する。

３号溝（第８図，写真図版３）

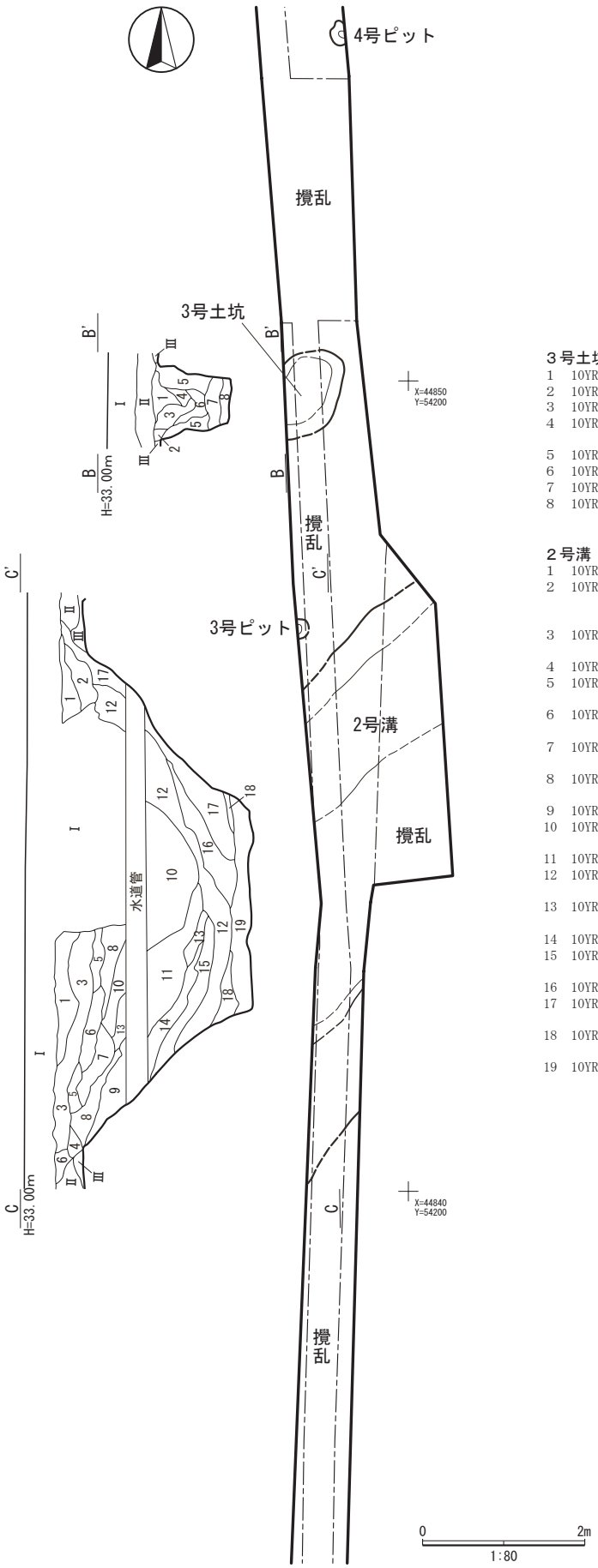
調査区の南西から北東にかけてほぼ直進しているが，中央部から東側を水道管埋設によって大きく攪乱されている。この溝は他の溝と違い，底面にテラス状の段を持つ。このため確認部分の全長は約30㎝，上面幅約530㎝だが，底面幅は約410㎝を測るが，このうちテラス状の段が約250㎝を占める。深さは確認面より約130㎝を測る。テラス状の段は約90㎝である。主軸の方向はＮ－58°－Ｅを示す。断面形は逆台形状を呈し，南側壁面中位でわずかに角度を変える。底面の標高は約30.8～30.9ｍ，テラス状の段が31.4～31.5ｍを測り，どちらもほぼ平坦である。土層の観察ではテラス状の段と溝との時期差は見いだせなかった。覆土は１・２号溝と同様，下層付近が自然の堆積層で上面が人為的に埋め戻した状況を示す。また，底面の硬化は確認されていない。出土遺物は縄文土器が２点，土師器の坏が１点，器種不明の土師器が１点出土している。どれも細片のため図示し得なかった。したがって，遺物からこの溝の構築年代や埋没年代に迫ることはできなかったが，１・２号溝との断面形の違いから，少なくとも覆土の状況や含有物が１・２号溝と類似していることから，その帰属時期は近接していると考えられる。また，東側を水道管埋設で破壊されているが，テラス状の段北側に，径が80～90㎝，深さ30㎝のピットが存在する（３号溝内P1）。覆土の堆積状況から溝に先行して人為的に埋められた可能性が高い。なお，３号溝から北に約６ｍに２号溝が存在する。

３号土坑（第７図，写真図版１）

Ⅲ層上面から掘り込まれている。西側が調査区外にかかるが，平面形は楕円形を呈し，推定長径約130㎝，短径約100㎝，深さ約90㎝を測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は急角度に掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが，掘り込み面や覆土の状況から判断して縄文時代の所産であろう。

１・２・４号土坑（写真図版２）

近・現代のいわゆる「貯蔵穴」と思われる掘り込みが３基検出されている。このうち，２号土坑は１号溝の断面で確認されていて平面形は不明である。1･4号土坑の平面形は基本的に不整長楕円形で，長径は130～400㎝，短径は50～100㎝，深さは10～40㎝を測る。断面形は皿状や筒状を呈し，壁は緩やかに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが，覆土の状況から貯蔵穴と判断した。



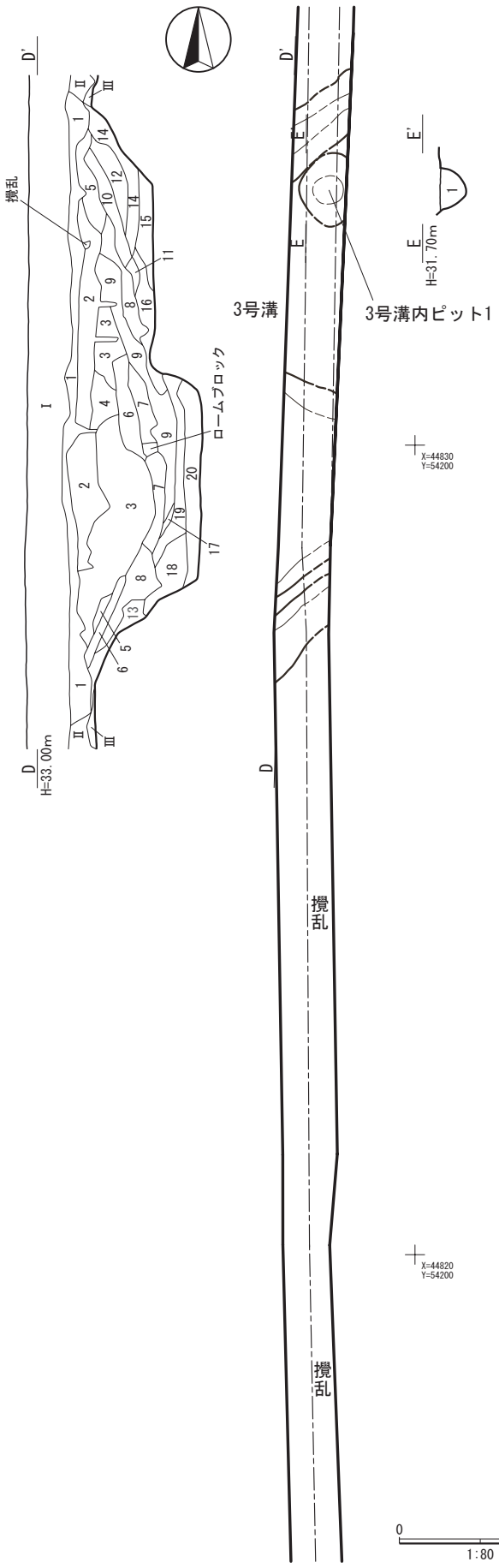
３号土坑

1	10YR2/2黒褐色土層	粘性がやや欠け締まる。ローム粒を少量含む。
2	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
3	10YR2/2黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
4	10YR2/2黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土・ローム粒を少量含む。
5	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。暗褐色土を少量含む。
6	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土を少量含む。
7	10YR5/6黄褐色土層	粘性をもち，締まる。暗褐色土を少量含む。
8	10YR5/8黄褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム土を多量に，焼土粒を少量含む。

２号溝

1	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
2	10YR6/6明黄褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ローム粒・ロームブロックを多量に，鹿沼土ブロックを少量含む。
3	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・ロームブロックを少量含む。
4	10YR2/2黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
5	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ロームブロック・黒色土を少量含む。
6	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を多量に，ロームブロック・黒色土を少量含む。
7	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム土・ローム粒・ロームブロックを少量含む。
8	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・ロームブロック・鹿沼土ブロック・黒色土を少量含む。
9	10YR2/2黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
10	10YR2/1黒色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒を多量に含む。
11	10YR4/6褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ローム土主体。
12	10YR4/6褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ローム土・ロームブロックを多量に含む。
13	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒・ロームブロックを少量含む。
14	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
15	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・黒色土を少量含む。
16	10YR2/1黒色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
17	10YR5/6黄褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム土を多量に，ローム粒を少量含む。
18	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・黒色土を少量含む。
19	10YR6/6明黄褐色土層	粘性をもつが締まりに欠ける。ロームブロックを多量に，鹿沼土ブロックを少量含む。

第７図　Ａ区遺構図（２）



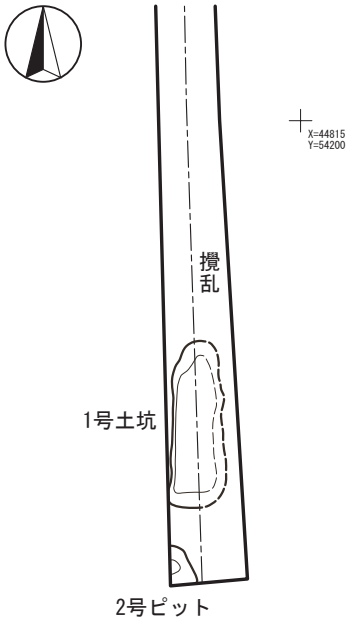
３号溝

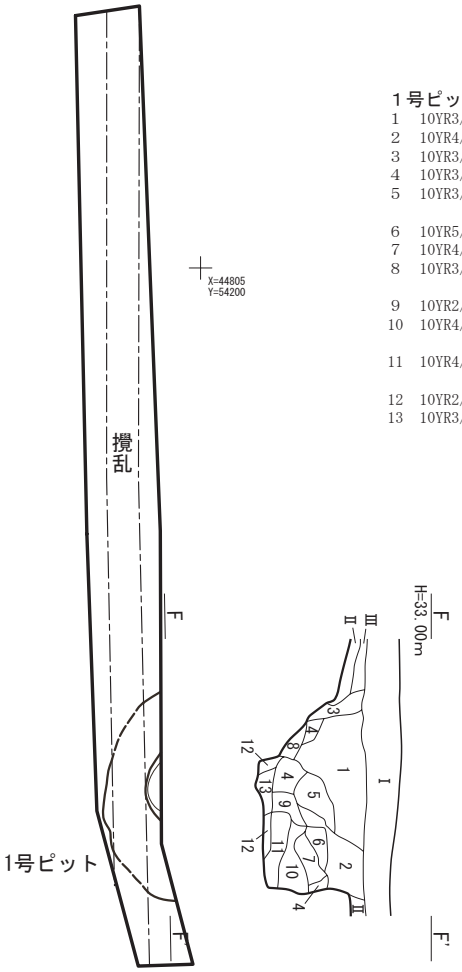
1	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
2	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を多量に含む。
3	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を多量に含む。
4	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・ロームブロックを少量含む。
5	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量含む。
6	10YR5/4にぶい黄褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を多量に，ロームブロックを少量含む。
7	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・黒色土を少量含む。
8	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
9	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締る。ロームブロック・ローム粒少量含む。
10	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
11	10YR5/6黄褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土を多量に，暗褐色土を少量，ローム粒を微量含む。
12	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，　や締まる。ローム粒・ロームブロック・黒色土を少量含む。
13	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土・ローム粒を少量含む。
14	10YR5/8黄褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土主体。
15	10YR5/4にぶい黄褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロックを多量に，鹿沼土ブロックを少量含む。
16	10YR4/6褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロックを少量，ローム粒を微量含む。
17	10YR4/6褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ロームブロックを多量に，鹿沼土ブロックを少量含む。
18	10YR5/4にぶい黄褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ロームブロックを多量に含む。
19	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロックを多量に，鹿沼土ブロックを少量含む。
20	10YR7/8黄橙色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロック・鹿沼土ブロックを多量に含む。

３号溝内ピット１

1	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒・ロームブロックを多量に，褐色土を少量含む。

第８図　Ａ区遺構図（３）





1号ピット

1	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量含む。
2	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
3	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量含む。
4	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
5	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を多量に，炭化物を微量含む。
6	10YR5/4にぶい黄褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土主体。
7	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土を多量に含む。
8	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム土・ローム粒を少量含む。
9	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
10	10YR4/3にぶい黄褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロックを少量含む。
11	10YR4/3にぶい黄褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロックを多量に含む。
12	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量含む。
13	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロックを多量に，ローム土を少量含む。

0　2m
1:80

第９図　Ａ区遺構図（４）

１号ピット（第９図，第３表，写真図版１）

東側および中央部が水道管埋設によって大きく攪乱されている。平面形は楕円形を呈し，推定長径約 220 ㎝，短径約 140 ㎝，深さ約 110 ㎝を測る。主軸方向はＮ－７°－Ｅを示す。断面形は逆台形状を呈し，壁はやや急角度に掘り込まれている。ピット底の北側で柱痕と考えられる落ち込みが検出されたことから，柱穴と判断した。遺物は出土しなかったが，掘り込み面や覆土の状況，覆土が１～３号溝の上位とよく似ていることにより，１～３号溝と近接した時期の帰属であろう。

２～７号ピット（第６～９図，第３表）

Ａ区北側を中心に６基の小ピットが検出された。断面図は図示しなかったが，いずれのピットも覆土はやや締まりの弱い黒色土の単一層で，調査範囲が限られていることもあり，等間隔に並ぶなどの，ピット間の対応関係などは確認できなかった。覆土の状況から中世以降に帰属する可能性が高い。

（２）Ｂ区の遺構

長さ 25 ｍ，幅 0.7 ～ 1.0 ｍの南北に細長い調査区で，水道管が調査区の東側を縦断していることから，この部分は調査を行うことができなかった。道路面から遺構の確認面であるソフトローム上面までの深さは約 30 ～ 60 ㎝を測る。また，標高は 31.5 ～ 32.0 ｍを測り，南側に傾斜している。

遺構としては，ピットが６基検出された。遺物は 12 号ピットから土師器甕とかわらけの細片が１点ずつ出土している。

12 号ピット（第 10 図，第３表，写真図版３）

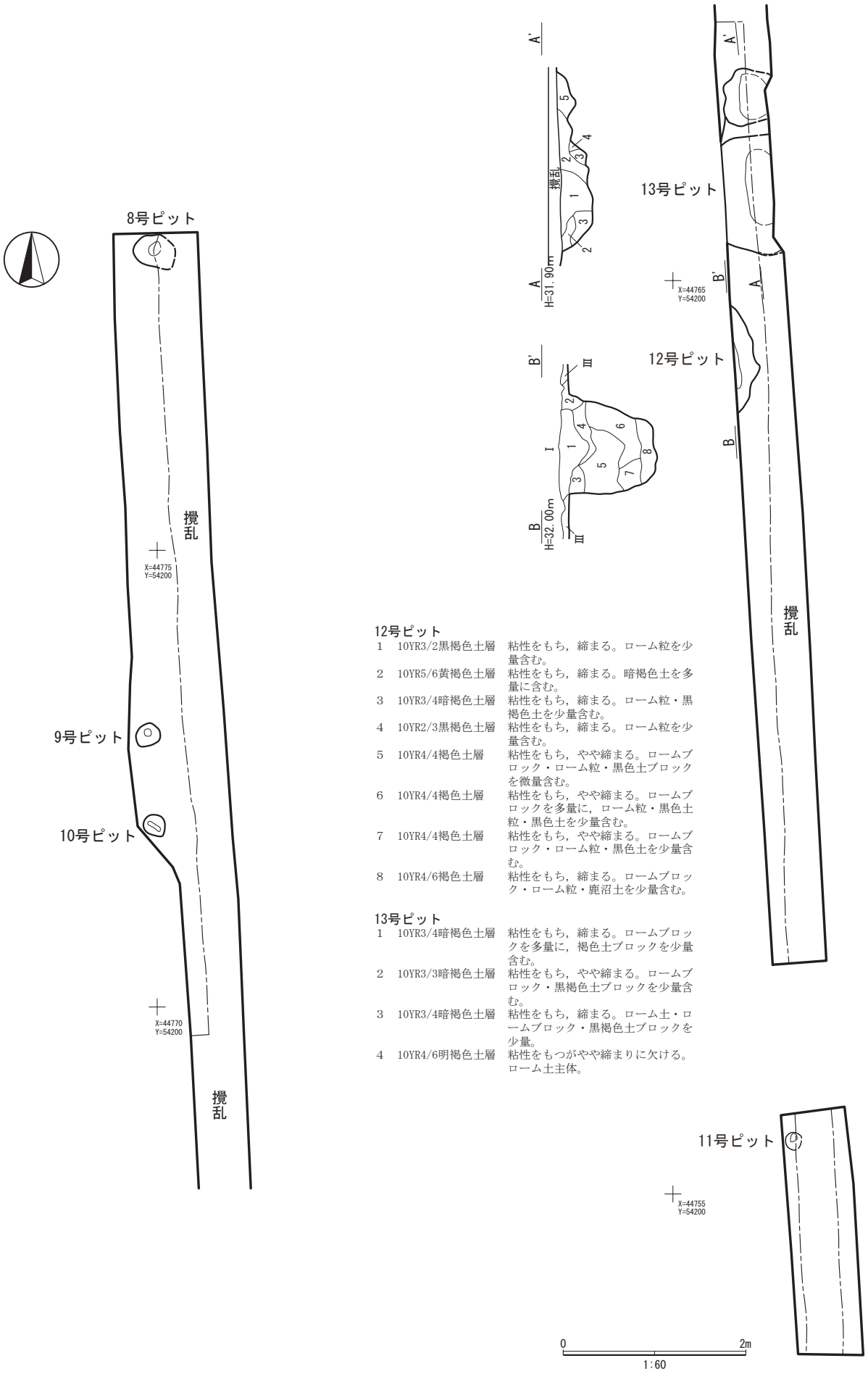
調査区の中央部付近に位置する。西側は調査区外へ続くため未調査である。平面形は推定楕円形を呈し，断面形は円筒状である。壁は急角度で掘り込まれている。確認面での径は約 110 ㎝，深さは約 100 ㎝を測る。主軸方向はＮ－７°－Ｗを示す。底面はやや凹凸をもつ。遺物は土師器甕が１点，かわらけが１点出土している。どちらも細片のため図示できなかった。遺物や覆土の状況から中世以降の帰属と考えられる。性格は不明である。

13 号ピット（第 10 図，第３表）

西側が調査区外へ続き，東側が水道管埋設によって大きく攪乱されている。平面形は不整長楕円形を呈し，推定長径約 200 ㎝，短径約 150 ㎝，深さ約 20 ～ 34 ㎝を測る。主軸方向はＮ－７°－Ｗを示す。断面形は鍋底状だが，北側がテラス状に浅くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。遺物が出土していないため，詳細な性格は不明だが，掘り込み面や覆土の状況から判断して１号ピットと近接した時期に帰属すると考えられる。

８～ 11 号ピット（第 10 図，第３表）

Ｂ区北側を中心に４基の小ピットが検出された。断面図は図示しなかったが，いずれのピットも覆土はやや締まりの弱い黒色土の単一層で，調査範囲が限られていることもあり，等間隔に並ぶなどの，ピット間の対応関係などは確認できなかった。覆土の状況から中世以降に帰属する可能性が高い。



12号ピット

1	10YR3/2黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
2	10YR5/6黄褐色土層	粘性をもち，締まる。暗褐色土を多量に含む。
3	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒・黒褐色土を少量含む。
4	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
5	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒・黒色土ブロックを微量含む。
6	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロックを多量に，ローム粒・黒色土粒・黒色土を少量含む。
7	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒・黒色土を少量含む。
8	10YR4/6褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロック・ローム粒・鹿沼土を少量含む。

13号ピット

1	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロックを多量に，褐色土ブロックを少量含む。
2	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。
3	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土・ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量。
4	10YR4/6明褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ローム土主体。

第10図　B区遺構図

(3) C区の遺構

長さ約 20 m，幅 0.6 ～ 1.2 mの南北に細長い調査区で，水道管が調査区の西側に縦断していることから，この部分は調査を行うことができなかった。道路面から遺構確認面であるソフトローム上面までの深さは約 40 ～ 60 ㎝だが，他の区と違い今市・七本桜軽石層が南端で確認されたことにより，調査地点は全体的に南方向へ原地形が傾斜していることがわかった。

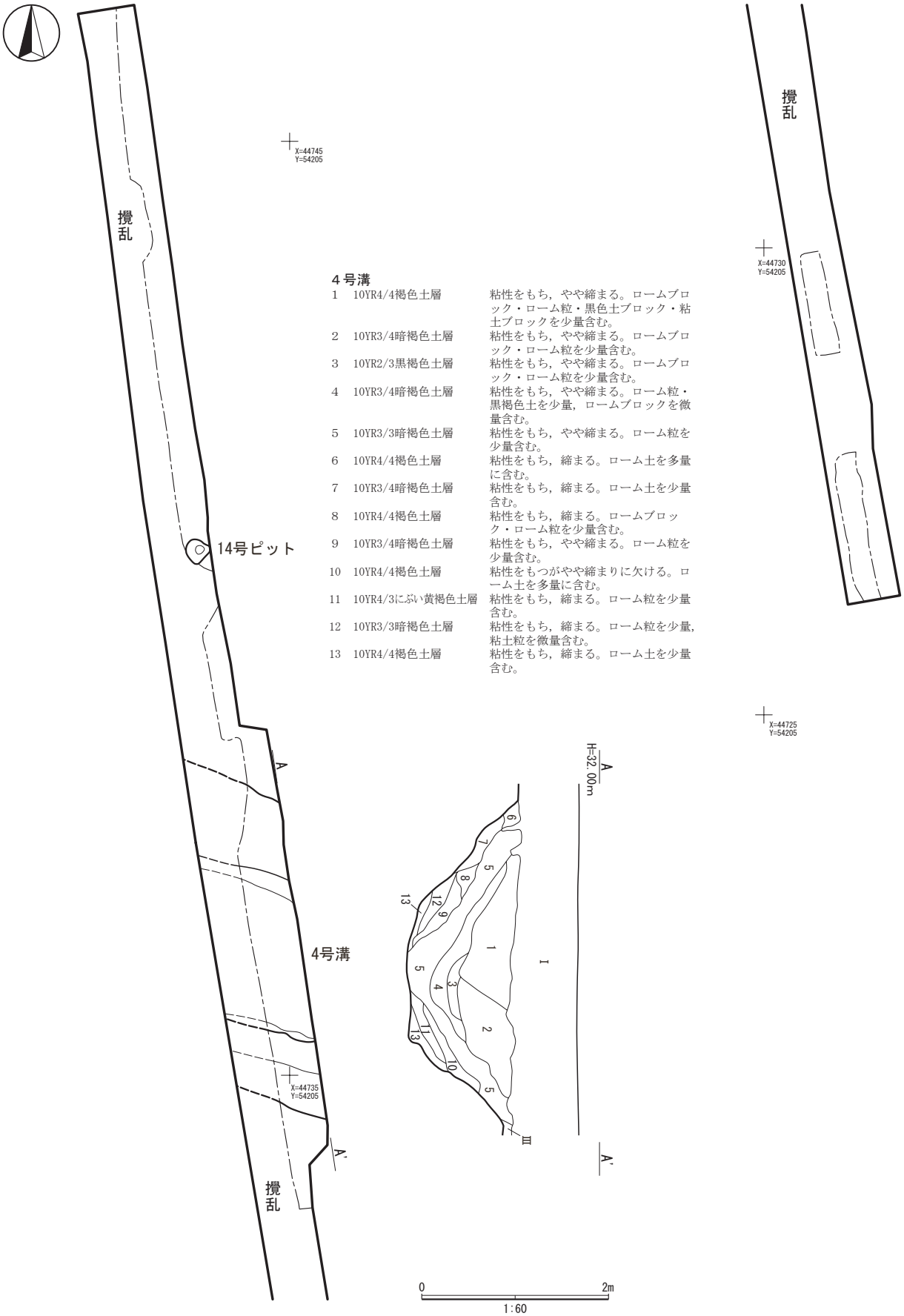
遺構としては，溝 1 条，ピット 1 基が検出された。遺物は縄文土器と須恵器の甕が 1 点ずつ出土している。

4 号溝（第 11 図，写真図版 4）

1 ～ 3 号溝と異なり，調査区の南西から北東にかけてほぼ直進しているが，西側を水道管埋設によって大きく攪乱されている。確認部分の全長は 50 ㎝，上面幅約 300 ㎝，底面幅は約 150 ㎝，深さは遺構確認面より約 110 ㎝を測る。主軸方向はN － 66° －Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は約 30.0 mを測り，底面はほぼ平坦である。覆土は中～下層は自然の堆積状況で，上層は人為的に埋められた様相を示す。底面の硬化は確認されていない。また，遺物は出土しなかったため，詳細な性格は不明だが，覆土の状況から 1・2 号溝と近接した時期に帰属すると考えられる。

14 号ピット（第 11 図，第 3 表）

C 区中央部に小ピットが 1 基検出された。断面図は図示しなかったが，覆土はやや締まりの弱い黒色土の単一層であった。覆土の状況から中世以降に帰属する可能性が高い。（林）



4号溝

1	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒・黒色土ブロック・粘土ブロックを少量含む。
2	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒を少量含む。
3	10YR2/3黒褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ロームブロック・ローム粒を少量含む。
4	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒・黒褐色土を少量，ロームブロックを微量含む。
5	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量含む。
6	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土を多量に含む。
7	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土を少量含む。
8	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。ロームブロック・ローム粒を少量含む。
9	10YR3/4暗褐色土層	粘性をもち，やや締まる。ローム粒を少量含む。
10	10YR4/4褐色土層	粘性をもつがやや締まりに欠ける。ローム土を多量に含む。
11	10YR4/3にぶい黄褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量含む。
12	10YR3/3暗褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム粒を少量，粘土粒を微量含む。
13	10YR4/4褐色土層	粘性をもち，締まる。ローム土を少量含む。

第 11 図　C区遺構図

第３表　ピット一覧

遺構番号	調査区	平面形態	規模長径（cm）	規模短径（cm）	断面形態	確認標高（m）	確認面からの深さ（cm）	帰属年代	出土遺物
1号ピット	A	楕円形	220	140	逆台形状	32.1 ～ 32.2	110	古墳～奈良時代	－
2号ピット	A	不整楕円形	62	41	円筒状	32.1	33	中世以降	－
3号ピット	A	円形	23	20	円筒状	32.1	16	中世以降	－
4号ピット	A	楕円形	30	23	円筒状	32.2	33	中世以降	－
5号ピット	A	楕円形	30	22	円筒状	32.2	28	中世以降	－
6号ピット	A	不整楕円形	30	22	円筒状	32.3	39	中世以降	－
7号ピット	A	円形	20	20	円筒状	32.3	28	中世以降	－
8号ピット	B	不整円形	28	19	円筒状	32.0	14	中世以降	－
9号ピット	B	円形	26	26	円筒状	31.9	31	中世以降	－
10号ピット	B	円形	21	21	円筒状	31.9	22	中世以降	－
11号ピット	B	円形	20	20	円筒状	31.5	31	中世以降	－
12号ピット	B	楕円形	110	110	円筒状	31.7	100	中世以降	土師器甕・かわらけ
13号ピット	B	不整長楕円形	200	150	鍋底状	31.4 ～ 31.5	34	古墳～奈良時代	－
14号ピット	C	円形	23	21	円筒状	31.2	20	中世以降	－

第４節　遺物（第 12 図，第４・５表）

今回の調査では縄文土器，土師器，須恵器，古代瓦，陶器などが遺物収納箱にして１箱分 124 点，2638.7g 出土している。大半が１号溝からの出土で，点数では約 81％の 101 点，重量では約 85％の 2233.2g を占める。土師器や須恵器は細片が多く時期の判定が困難であったが，掲載し得た遺物を解説し若干の考察を加えていく。

縄文土器は 17 点，207.1g がＡ区の表土を中心に出土している。大半は細片だが，図示し得た遺物は５点である。1 は口縁部がやや外側に広がり，丁寧にナデ調整を施している。また，頸部に隆線を横走して，上下に沈線を施している。4 は外面をナデ調整している胴部～底部片である。これらは縄文時代中期後半から後期前半の土器であろう。2 ～ 3・5 は胴部の外面に縄文を施文後平行する沈線で区画し，内側を磨り消している。縄文時代中期後葉加曽利Ｅ４式期の土器であろう。

土師器・須恵器は遺構に伴うものを中心に掲載したが，21 を除き１号溝からの出土で，11 の須恵器甕以外はその黒色土層中からの出土である。

須恵器は 13 点，552.8g がＡ区を中心に出土している。6 の須恵器坏はやや大振りで，底部は回転ヘラ切り離し後周縁を回転ヘラケズリで整形し，見込み部に「×」印の線刻が施されている。胎土に雲母片が多量に混入していることや焼成から，新治窯跡群産と考えられる。7 の須恵器坏は口縁部が

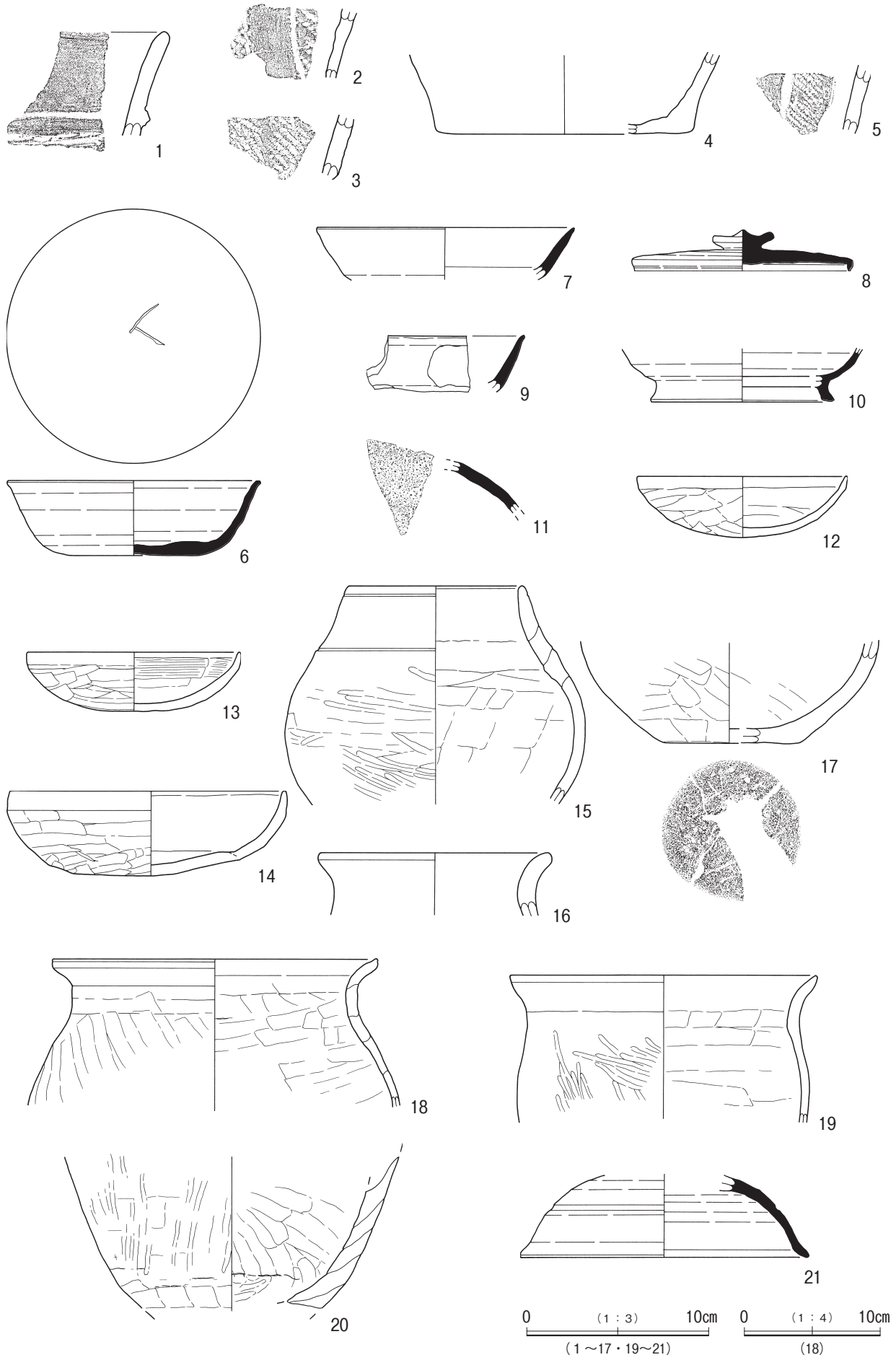
わずかに外反するが，体部は直線的に立ち上がる。底部は欠損している。胎土には海綿骨針が混入しており，木葉下窯跡群産のものであろう。8の須恵器蓋はかえしが無く，摘みが扁平擬宝珠状，天井部が直線的で，焼成が淡黄色のもので，色調や胎土から木葉下窯跡産であろう。9の須恵器坏はやや焼成が甘く，雲母片が混入していることにより新治窯跡群産と考えられる。10の須恵器高台付壺は高台部と胴部の一部しか残存していないが，器厚が薄く丁寧な整形を施し，胎土も精製されていて，焼成も良好なものである。11の須恵器甕は，胎土に白色粒子や石英が多量に混入し，内外面ともに器面がザラザラになるほど混入物が浮き出ている特徴を持つ。細片のため詳細は不明だが古代期の帰属と考えられる。2号溝から出土した21の須恵器坏蓋は，外面全体に自然釉がかかり，口縁部が外反する合子状の坏蓋である。また，内外面に黒色湧出物が少量確認できる。

以上，須恵器は胎土や器形の特徴，調整方法より8世紀前半頃のものと考えられる。

土師器は90点，1830.1gが1号溝を中心に出土している。12～14は丸底の坏である。口縁部が直立して，直下にわずかな稜をもち，器形は扁平である。体部はヘラケズリ調整を施す。これらは古墳時代後期鬼高式の系譜を持つ坏である。径は約11.5㎝（12・13）と約15㎝（14）を測る。14は当該地で出土している同形態の坏よりやや径が大きいことが注意される。これらは器形の特徴や調整から7世紀後葉から8世紀初頭頃の所産であろう。

15は口縁部が内側にすぼまる器形である。胴部の中位にわずかだが赤彩を施している。土師器壺である。この器形が特徴的な土師器壺は茨城県南部から千葉県にかけて分布しており，茨城県つくば市熊の山遺跡第796住や茨城県結城郡八千代町の菱毛道西遺跡4号住居跡などで類例が出土している（矢ノ倉・小林ほか2000，山野井・齋藤ほか2009）。胎土に雲母が混入していることにより，これも茨城県南部付近で製作され当地に搬入された可能性が高い。口縁部の形状や器形などから6世紀後半から7世紀前半頃のものであろう。16の土師器壺は，口縁部が大きく外反し，全体的に肥厚している。15と同時期のものであろうか。この時期は，第41次調査で溝底部硬化面土中から出土した遺物群や，溝の区画内部から検出された住居跡と時期を同じくする。17～20は土師器甕である。18は口唇部を上方に摘み出されていて，口縁部が大きく開く。19は口唇部外面を面取りし，口縁部は緩やかに開く。18～20は形状の特徴や調整方法等からいわゆる「常総型」土師器甕と考えられる。

以上，掲載した遺物について概観したが，今回の発掘調査では，21以外の遺物は1号溝の中層である自然の堆積層の黒色土層中から出土していて，年代的には6世紀後半から7世紀前半頃のもの（15・16）と，8世紀前半期の2群に分かれると考えられる。このことにより，1号溝が造営された年代を絞り込める材料が増えたこと，6・9の新治窯跡群産や15の土師器に代表される搬入された土器が出土しているなどが成果として挙げられるであろう。（林）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0 (1：3) 10cm
(1～17・19～21)
0 (1：4) 10cm
(18)

第12図　出土遺物

第４表　出土土器属性一覧

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率（%）	口径（推定口径）（cm）	底径（推定底径）（cm）	器高（残存高）（cm）	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	色調	備考
1	A区表土	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	細片	－	－	－	口縁部外面磨き，内面ナデ。口縁部と頸部の境に隆線を横走，その上部に沈線を一条横走。	石英･砂礫少量，白色粒子微量。	－	良好	10YR7/4 にぶい黄橙色	縄文時代中期後半～後期前半。
2	A区表土	縄文土器	深鉢	胴部	細片	－	－	－	外面荒い縄文を施文後，沈線で縦方向に区画し，内面を磨り消す。内面剥離して不明。	砂粒少量。	－	良好	10YR8/6 黄橙色	縄文時代中期後半加曽利Ｅ４式土器。
3	A区表土	縄文土器	深鉢	胴部	細片	－	－	－	外面を荒い縄文により施文。	赤色粒子微量。	－	良好	10YR6/6 明黄褐色	縄文時代中期後半加曽利Ｅ式土器。
4	A区表土	縄文土器	深鉢	胴部～底部	細片	－	－	<4.2>	内外面ナデ。	砂粒微量。	－	良好	10YR7/6 明黄褐色	
5	C区表土	縄文土器	深鉢	胴部	細片	－	－	－	外面細かい縄文を施文後，沈線により縦方向に区画し，内面を磨り消す。内面ナデ。	白色粒子少量，雲母微量。	－	良好	外面：10YR3/4 暗褐色，7.5YR5/8 明褐色	縄文時代中期後半加曽利Ｅ４式土器。
6	1号溝	須恵器	坏	口縁部～底部	70	(13.8)	7.5	4.1	口縁部ヨコナデ，外反。底部よりやや丸みを帯び立ち上がる。底部回転ヘラ切り後周縁回転ヘラケズリ。ロクロ成形。	雲母多量，白色粒子･砂粒少量。	－	良好	10YR4/3 にぶい黄褐色	底部文字種不明線刻，新治窯跡群産。
7	1号溝	須恵器	坏	口縁部～体部	30	(14.0)	－	<2.9>	口縁部ヨコナデ。体部直線的に立ち上がる。	白・赤色粒子少量。	○	不良	2.5Y5/3 黄褐色	木葉下窯跡群産。
8	1号溝	須恵器	蓋	摘み部～端部	80	12.0	－	2.2	摘み扁平擬宝珠状。天井部直線的。かえし無し。端部折り曲げ外面面取り，断面形Ｖ字状。右回転ロクロ成形。	白色粒子・チャート少量。	－	良好	5Y8/3 淡黄色	摘み径 3.3 cm，摘み高 1.1 cm，木葉下窯跡群産。
9	1号溝	須恵器	坏	口縁部～体部	20	－	－	<3.0>	口縁部ヨコナデ。体部直線的に立上がる，横方向ヘラナデ。	白色粒子・チャート・雲母少量。	－	良好	10YR5/8 黄褐色	赤焼け，新治窯跡群産。
10	1号溝	須恵器	高台付壺	胴部～底部	10	－	(10.2)	(3.2)	高台部外縁部で接地。丁寧な成形。	白色粒子微量。	－	良好	7.5Y5/1 灰色	
11	1号溝	須恵器	甕	胴部	細片	－	－	－	横方向のナデ。	白色粒子・石英多量。	－	良好	N4/ 灰色	器面に白色粒子と石英が多量に浮き出ている。
12	1号溝	土師器	坏	口縁部～底部	40	(11.6)	－	3.3	口縁部ヨコナデ，垂直に立ち上がる。体部ヘラケズリ。丸底。	白色粒子・砂粒少量，雲母微量。	－	良好	10YR4/3 にぶい黄褐色	鬼高系
13	1号溝	土師器	坏	口縁部～底部	50	(11.8)	－	3.2	口縁部ヨコナデ，垂直に立ち上がる。体部ヘラケズリ。丸底。	白・赤色粒子少量。	－	良好	5YR5/8 明赤褐色	鬼高系
14	1号溝	土師器	坏	口縁部～底部	70	15.2	－	4.6	口縁部ヨコナデ，口縁部直下にわずかな稜。体部ヘラケズリ。器形扁平，丸底。	白色粒子・石英微量。	－	良好	10YR5/6 黄褐色	鬼高系。
15	1号溝	土師器	壺？甑？	口縁部～胴部	50	9.6	－	<11.9>	口縁部ヨコナデ，内傾。胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ，内面ヘラナデ。最大径胴部中位。	白色粒子・石英少量，雲母微量。	－	良好	5YR5/6 明赤褐色	胴部中位にわずかな赤彩。
16	1号溝	土師器	壺	口縁部	10	(12.7)	－	<3.4>	口縁部ヨコナデ，肥厚。	白・黒色粒子少量。	－	良好	5YR4/6 赤褐色	
17	1号溝	土師器	甕	胴部～底部	20	－	(7.3)	<5.5>	胴部外面横方向ヘラケズリ，内面ヘラナデ。底部ナデ。	白・赤色粒子少量。	－	良好	外面：5YR2/4 極暗赤褐色，内面：10YR5/8 黄褐色	
18	1号溝	土師器	甕	口縁部～胴部	30	(24.0)	－	<10.7>	口唇部上方に摘み上げる。口縁部ヨコナデ。胴部外面斜方向のヘラケズリ後ナデ，内面横方向ヘラケズリ。	白色粒子・長石少量，雲母微量。	－	良好	7.5YR5/4 にぶい褐色	常総型甕。
19	1号溝	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(16.9)	－	<8.0>	口唇部外面面取り。口縁部ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラミガキ，内面横方向のヘラナデ。	白色粒子少量，雲母微量。	－	良好	10YR3/4 暗褐色	常総型甕。
20	1号溝	土師器	甕	胴部～底部	20	－	－	<8.5>	胴部外面斜方向ヘラミガキ，内面斜方向ヘラケズリ，下端多方向ヘラケズリ。	白色粒子・砂粒少量，雲母微量。	－	良好	外面：5YR5/6 明赤褐色，内面：10YR5/3 にぶい黄褐色	常総型甕。
21	2号溝内攪乱	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	50	(16.0)	－	<4.5>	口縁部外側に大きく開く，ヨコナデ。体部外面中央部でわずかに段をつける。自然釉。丸底。	白・黒色粒子，チャート粒微量。	－	良好	2.5Y6/1 黄灰色	体部内外面黒色湧出物。

第５表　遺物計量表

出土地点			１号溝			２号溝			３号溝			12号ピット			A区表土一括			C区表土一括			総計		
出土遺物			点数	個体数	重量（g）	点数	個体数	重量（g）	点数	個体数	重量（g）	点数	個体数	重量（g）	点数	個体数	重量（g）	点数	個体数	重量（g）	点数	個体数	重量（g）
縄文時代	土　器		8	3	20.6				2	2	36.0				6	6	136.1	1	1	14.4	17	12	207.1
小　計			8	3	20.6				2	2	36.0				6	6	136.1	1	1	14.4	17	12	207.1
奈　良・平安時代	須恵器	坏	3	3	247.9	2	1	103.1													5	4	351
		坏類	1	1	11.6																1	1	11.6
		甕	1	1	11.4													1	1	4.8	2	2	16.2
		高台付壺	1	1	13.3																1	1	13.3
		蓋	1	1	102.2										1	1	21.4				2	2	123.6
		不明													2	2	37.1				2	2	37.1
	小　計		7	7	386.4	2	1	103.1							3	3	58.5	1	1	4.8	13	12	552.8
	土師器	坏	5	3	350.5				1	1	9.6										6	4	360.1
		坏類	4	4	38.4										1	1	3.0				5	5	41.4
		高台付坏類													1	1	9.8				1	1	9.8
		甕	47	21	660.4	1	1	7.2							1	1	8.2				49	23	675.8
		壺	20	2	691.8																20	2	691.8
		不明	7	7	44.8				1	1	5.6	1	1	0.8							9	9	51.2
	小　計		83	37	1,785.9	1	1	7.2	2	2	15.2	1	1	0.8	3	3	21.0				90	44	1,830.1
	平　瓦	ヘラケズリ	2	2	38.2																2	2	38.2
	小　計		2	2	38.2																2	2	38.2
小　計			92	46	2,231.1	3	2	110.3	2	2	15.2	1	1	0.8	6	6	79.5	1	1	4.8	105	58	2,421.1
中世以降	土師質土器	かわらけ										1	1	8.4							1	1	8.4
	陶　器	碗	1	1	2.1																1	1	2.1
小　計			1	1	2.1							1	1	8.4							2	2	10.5
総　計			101	50	2,233.2	3	2	110.3	4	4	51.2	2	2	9.2	12	12	215.6	2	2	19.2	124	72	2,638.7

第４章　総括

台渡里官衙遺跡は，水戸市の北西，那珂川西側の台地上標高 32 m程に立地し，崖線より西に約 800 mほど入った地点に位置する。今回の調査地点は，台渡里官衙遺跡内の南前原地区に相当する。北側には台渡里廃寺や那賀郡衙である台渡里官衙遺跡長者山地区，南東約２㎞には県内有数の規模を持つ愛宕山古墳が存在する。現在この地域は畑地と宅地が混在しており，往時の面影を偲ぶことは出来ないが古くから大きく発展していた地域の一つである。

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴い実施された。過去に水戸市が行った第 32 次調査で確認された溝（川口 2009，以下第 32 次確認溝），第 41 次調査で検出された溝（以下第 41 次検出溝），今回の調査地点北側に位置するテニスコート内において茨城大学の調査で確認された溝（以下第 44 次検出溝）が今回の調査区方向に続く可能性が当初より想定されており，目的のひとつとしてこの溝の性格や方向，年代を確認することを想定していた。

発掘調査の結果，溝４条，土坑５基，ピット 13 基が検出された。遺構の年代は，縄文時代から近･現代である。以下に時代順を追って若干の考察を加え総括としたい。

１　縄文時代

Ａ区から土坑が１基検出された。遺物は表土を中心に土器が 17 点が出土した。土器は縄文時代中期加曽利Ｅ４式期の深鉢胴部片が中心である。

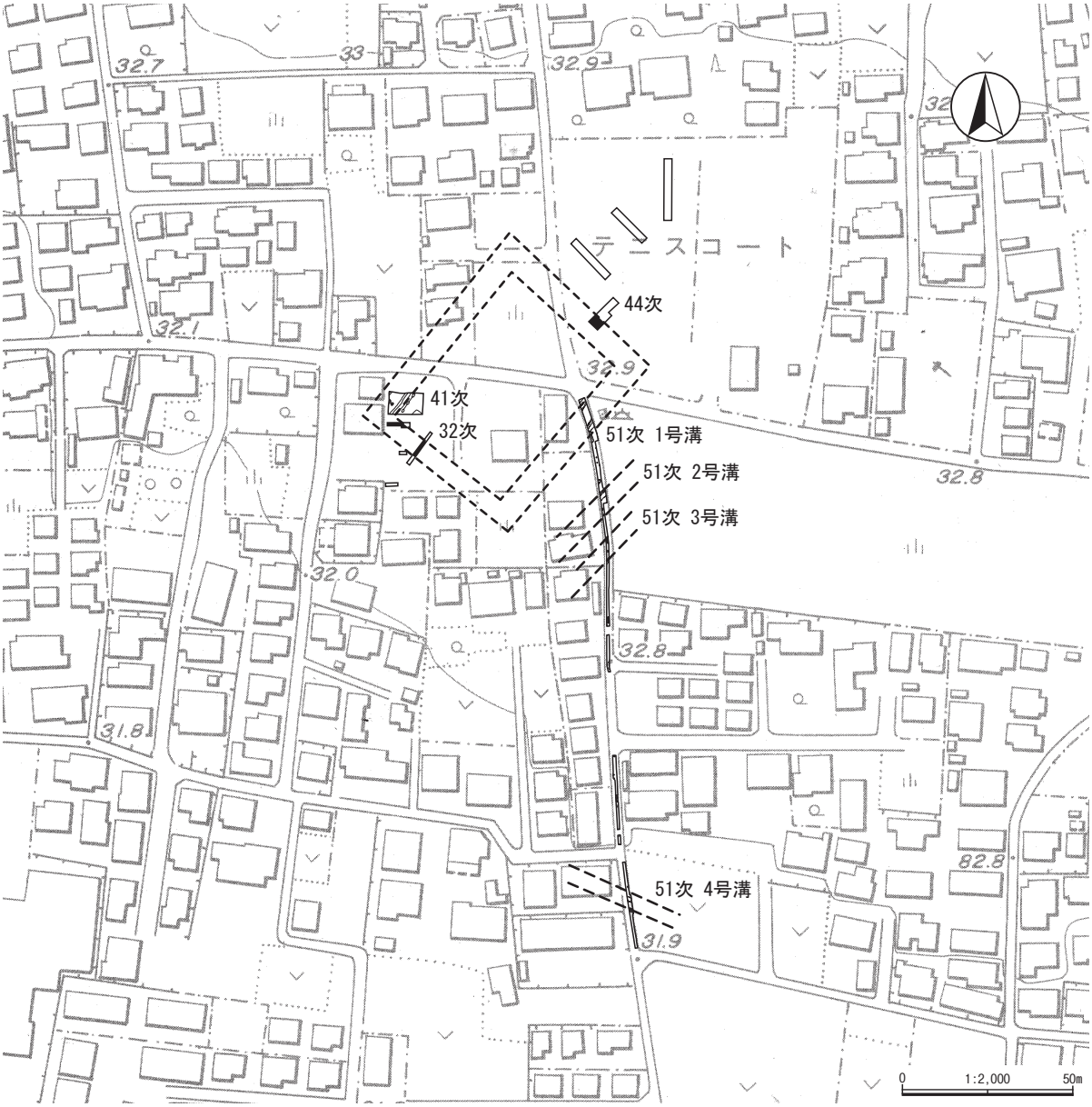
これまで，台渡里官衙遺跡の近隣台地縁辺部を中心に当該期の遺構の存在が知られていたが，調査区近辺では未確認であった。今回の土坑検出は，縄文時代における本地点の活動一端が確認されたことであり成果の一つである。

２　古墳時代から奈良時代

当該期の遺構として，溝が４条とピットが２基検出された。遺物は須恵器が坏や蓋など 13 点，土師器が坏や甕を中心に 90 点出土している。

検出された４条の溝は，第 32 次調査の確認溝，第 41 次調査の検出溝，第 44 次調査の検出溝との関係を考えた場合，Ａ区で検出された３条の溝は１号溝から 17 m南に２号溝，２号溝から６m南に３号溝，Ｃ区で検出された４号溝は３号溝から約 100 m南に位置している（第 13 図）。このことから，４号溝は過去の調査で確認された溝と距離があり，その間に４号溝と対応する溝が検出されていないことなどにより除外して考える。１～３号溝は，底部の標高が約 30 m前後で主軸方向がＮ－ 44°～ 58°－Ｅを測ること，覆土が底部より 1/3 ほど自然に堆積しており，その後人為的に埋められた様相を呈すること，断面形の基本的な形が逆台形状となることなどが共通した特徴である。

過去の調査検出溝と比較すると，第 41 次調査検出溝と１号溝の規模や覆土の状況，底面に硬化部分が存在していたこと，出土遺物が黒色土層中心であることが類似している。さらに１号溝と第 41 次調査検出溝の出土した遺物の年代にも差異はなく，１号溝が第 32 次調査・第 41 次調査の溝と同一の溝の可能性が高い。このことから推定される区画域の規模は，約 50 × 60 mである（第 13 図）。造営年代は，第３章において述べたように，出土遺物が６世紀後半から７世紀前半頃と，８世紀前半の



第 13 図　台渡里官衙遺跡で検出された溝の想定区画域

２群に分かれる。第 41 次調査検出溝からも６世紀末から７世紀代の遺物が溝底部の硬化面内より出土していることにより，この時期には溝が存在しており，８世紀前半の段階では埋没途中であったと考えられる。７世紀末～８世紀前半は，調査区北に位置する台渡里廃寺観音堂山地区が造営された時期とされ，この溝はその造営に伴い埋められた可能性も指摘できるが，今回の発掘調査においてそれを確認できる遺物・遺構は検出されなかった。

１号溝が構成する区画域がどのような性格を持つかという点については，区画内の施設が未確認であり不明である。溝の規模や第 41 次調査の柵列，溝の外側から人為的に埋め戻された覆土の様相などから土塁の存在も窺われる。また，溝の区画が方形と想定されることや，遺物の年代が６～７世紀頃であることを含めて考えると，推定方形区画域を持つ豪族の居館跡や初期の評衙の可能性も考えら

れる。豪族居館の茨城県内での事例（第７表）と比較すると，この溝の規模が他の居館跡の区画溝に比して大きいことや，造営された年代がつくば市梶内向山遺跡例と並行する年代を示すことがわかる。また，評衙としては県内の類例が少ないため比較はできないが，北側に那賀郡衙と想定される地域が存在すること，南側に愛宕山古墳など６～７世紀以前に帰属する遺構が当該地と比して数多く検出されていることなどから，当該地における中心地の移動を考えたうえで，その可能性も指摘できる。しかし積極的に評衙の存在を示す遺物の出土はないため，現時点においては可能性の指摘にとどめたい。また，豪族の居館と評衙が同一地域内に存在していた可能性も考えられるが，ここでは豪族居館としておきたい。

茨城県内の類例から今回の調査で確認された溝は，調査事例としては希少であり，その規模から構築した人々の力の大きさが推定される。今回検出された区画域と，北側に位置する台渡里廃寺跡・那賀郡衙，南側に位置する愛宕山古墳を中心とする地域との関連性を，今後の調査・研究により明らかにすることが課題のひとつである。

２・３号溝は，基本的な断面形や底部の標高，主軸方向，埋没の仕方が１号溝と類似するが，規模が一回り小さく，底部に明確な硬化面が未検出であり，遺物量も少ないことが１号溝との相違点として挙げられる。２号溝から出土した21以外の遺物は細片であり，年代を決定するには至らなかった。構築年代は，位置などを考えると，１号溝等で構成される区画域と密接な関係（拡張や多重の堀もしくは別の区画域）も考えられる。また，３号溝で検出されたテラス部やピットも，付帯施設とも考え

第６表　台渡里遺跡第32・41・44・51次調査で確認された溝一覧

遺跡名	遺構番号	区画溝の上面幅（m）	区画溝の底面幅（m）	区画溝の深さ（m）	区画溝底面の標高（m）	主軸方向	存続時期	土塁	柵列	内部施設
台渡里遺跡第32次	－	6.5	－	－	－	N－40°－W	－	?	?	
台渡里遺跡第41次	－	6.0～7.0	3.7	2.5	－	N－50°－E	６ｃ末～７ｃ中？	○	○	竪穴住居跡１
台渡里遺跡第44次	堀A	4.5	2.0	2.0	－	－	？～７ｃ末	－	×	
	堀B	2.0	－	1.0	－	－	Aと同じか	×	－	
台渡里遺跡第51次	１号溝	7.4	3.7	2.4	約29.8m	N－50°－E	－	－	×	
	２号溝	4.1	2.0	2.0	約30.2m	N－44°－E	－	－	×	
	３号溝	5.3	2.5	0.9～1.3	約30.8～31.5m	N－58°－E	－	－	×	
	４号溝	3.0	1.5	1.1	約30.0m	N－66°－W	－	－	×	

第７表　茨城県域所在の豪族居館一覧

遺跡名	遺構	規模（m）	区画溝の上面幅（m）	区画溝の底面幅（m）	区画溝の深さ（m）	存続時期	土塁	柵列	内部施設
那珂市森戸遺跡		90×90	2.9～4.7	1.8～2.4	0.8～1.3	３ｃ中～５ｃ初	×	×	竪穴住居跡１
茨城町奥谷遺跡		50×50	2.0～4.3	1.0～1.8	0.6～1.2	４ｃ前～５ｃ初	×	×	
桜川市辰街道遺跡		75以上×58以上	5.6～8.5	1.2～2.9	2.0	４ｃ中～６ｃ前	×	×	竪穴住居跡13
つくば市梶内向山遺跡	外堀	110×65	7.0～9.6	6.4～8.6	0.3～0.8	６ｃ中～７ｃ初	○	×	竪穴住居跡16
	内堀	65×65	7.0～7.4	6.4～6.8	0.5～1.0				
常総市国生本屋敷遺跡		80×76	3.46～4.2	1.3～1.5	1.5～1.8	４ｃ前～４ｃ後	○	○	竪穴住居跡２

（第６・７表　田中裕2009より転載）

られるがその性格を明らかにするには至らない。

４号溝は断面形や覆土の特徴が１～３号溝と類似し，規模は２・３号溝と類似するが遺物の出土はない。これらの特徴から他の溝との関連が考えられるが，１～３号溝の約 100 m南に位置しておりどのような広がりを持つのかは今後の調査における課題のひとつである。

２基のピット（１号・13 号）は，出土遺物が細片のため年代を決定するものはないが，覆土や平面の形状から掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が指摘される。覆土の状況より溝と近接した時期の埋没を推定している。２基のピットが同一の建物か，その場合どのような規模を有するのかについては不明であるが，１号溝が構成する区画域の外側に存在しており，ピットの規模から大型の建物が想定される。

３　中世

Ｂ区中央で検出された 12 号ピットと，かわらけが当該期のものである。細片のため詳細な時期は不明である。調査区の北側約 800 mの台地突端部に中世以降に長者山城が所在しておりその関連性も推定される。

４　近・現代および時代不明

近・現代の土坑はＡ区より３基，時代不明のピットがＡ区より６基，Ｂ区より４基，Ｃ区より１基の計 11 基検出された。土坑はいわゆる「貯蔵穴」と呼称されるもので，当該地に古くから住む方の話によれば，今回の調査地点は 40 年程前まで，畑地の中に宅地が存在していたそうなので，その頃に構築されたものであろう。また，ピットは遺物が出土していないため年代ははっきりしなかったが，覆土の状況より中世以降の帰属と考えられる。また，建物跡と想定できるピットの配列などは確認できなかった。

５　まとめ

今回の調査は，多くの成果と今後の課題が見出された。成果としては，縄文時代における生活の痕跡が確認されたこと，第 32 次・41 次調査で確認された溝と同一と考えられる溝が検出され（第 44 次は検討中である），なおかつその溝が区画する区域が方形区画となる可能性が高まったこと，他に並行する３条の溝が存在すること，この溝と近接する時期に掘立柱建物が存在していた可能性が高いことなどである。特に区画域の範囲が判明したことは茨城県内で事例数の少ない古墳時代の大型の溝を伴う方形区画域における新しい事例として大きな成果といえる。また，１号溝から 15 の土師器壺が出土したことは，台渡里廃寺跡出土軒丸瓦の瓦当文様系譜（龍角寺跡などの山田寺系など）を考えるうえでの一助となる成果である。しかし，台渡里廃寺跡・那賀郡衙と溝の関係，区画域と２・３号溝との関係，４号溝の範囲とその性格，掘立柱建物の範囲とその性格など，成果の大きさに比例して今後の課題も多い。大半は今後の周辺地域における発掘調査で解明されるであろうが，特に台渡里廃寺跡・那賀郡衙と溝の関係が判明すれば，愛宕山古墳とその後の台渡里廃寺・那賀郡衙との間に，郡衙や寺院の造営者とのつながりやその中心地の移り変わり等，これらの研究が大きく前進することになる。今後当該地の発掘調査を注視していきたい。（林）

引用・参考文献

浅井哲也　1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート』創刊号　財団法人茨城県教育財団

1993「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート』第２号　財団法人茨城県教育財団

渥美賢吾　2005「木葉下窯跡群における須恵器生産の変化と画期」『筑波大学先史学・考古学研究』第 16 号　筑波大学人文社会学研究科　歴史・人類学専攻

井　博幸・小宮山達雄　1999「第７章　内原町周辺の主要古墳と出土遺物」『牛伏４号墳の調査』内原町教育委員会

伊東重敏　1975『常陸考古学研究所学報第16集　Site No.6181　水戸地方における古代窯業の研究（その２）水戸市田谷廃寺跡出土古瓦雑考』常陸考古学研究所

井上義安編　1992『水戸市アラヤ遺跡　北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会

井上義安・千葉隆司　1995『水戸市台渡里廃寺跡　都市計画道路３・６・30 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会

井上義安・千葉隆司・樫村宜行ほか　1995『水戸市堀遺跡　堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市堀遺跡発掘調査会

井上義安・栗原芳子　1996『水戸市台渡里遺跡　共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房

井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子・根本睦子　1998『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書　平成 10 年度版』水戸市教育委員会

茨城県教育委員会　2000『茨城県遺跡地図』

茨城大学考古学研究会　1976『茨城大学周辺遺跡分布調査報告書Ⅱ』

江幡良夫・吹野富美夫　1998「水戸市軍民坂遺跡出土の掻器」『常総台地』第 14 号　常総台地研究会

大森信英　1952a「渡里村大字堀字西原四号地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第１号　茨城高等学校史学部

1952b「渡里村大字堀字西原の地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第１号　茨城高等学校史学部

1952c「渡里村大字渡里字アラヤ遺蹟予備調査に於ける報告」『茨城高等学校史学部紀要』第１号　茨城高等学校史学部

1974「69　権現山下横穴群」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』茨城県

小川和博・大渕淳志・松谷暁子・川口武彦　2006『台渡里遺跡―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第５集　水戸市教育委員会

樫村宣行・浅井哲也　1992「常陸地域の鬼高式土器－久慈川･那珂川流域を中心として－」『考古学ジャーナル』第 342 号　ニュー・サイエンス社

樫村宣行　1993a『（仮称）水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書　白石遺跡』茨城県教育財団調査報告第 82 集　財団法人茨城県教育財団

1993b「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』第２号　財団法人茨城県教育財団

2005「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム　古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として－』茨城県考古学協会

加藤雅美　1990「第５章　森戸遺跡」『一般国道 349 号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　北郷Ｃ遺跡　森戸遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 55 集　財団法人茨城県教育財団

川口武彦　2006「範囲確認調査の成果」『国指定記念シンポジウム　台渡里廃寺跡を考える　資料集』水戸市教育委員会・茨城県教育委員会

2007「発掘された常陸国最古の初期寺院－国指定史跡台渡里廃寺跡－」『常総の歴史』35 号　崙書房

2009「２－18　台渡里遺跡（第 32 次）」『平成 18 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会

川口武彦・小松崎博一・新垣清貴・大津郁子・小野寿美子　2005『台渡里廃寺跡－範囲確認調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第１集　水戸市教育委員会

川口武彦・関口慶久・新垣清貴・渥美賢吾・木本挙周　2007『平成 17 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第 22 集　水戸市教育委員会

川口武彦・渥美賢吾・木本挙周　2009『台渡里１』水戸市教育委員会

川崎純徳　1982『茨城の装飾古墳』新風土記社

川村満博・島田和宏　2003『梶内向山遺跡－一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）および高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション（仮称）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書－』茨城県教育財団文化財調査報告第 199 集　財団法人茨城県教育財団

瓦吹　堅　1988「常陸の古印」『婆良岐考古』第 10 号　婆良岐考古同人会

1991「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅲ－観音堂山・南方・長者山地区の性格について－」『婆良岐考古』第 13 号　婆良岐考古同人会

木本雅康　2008『遺跡からみた古代の駅家』山川出版社

黒澤彰哉　1998「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』第 25 号　茨城県立歴史館

2000「台渡廃寺と那賀郡衙」『文字瓦と考古学』国士舘大学実行委員会

黒澤彰哉・瓦吹　堅・川口武彦・渥美賢吾ほか　2004『台渡里廃寺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市教育委員会

鯉淵和彦　1989『奥谷遺跡　小鶴遺跡－一般国道 6 号改築工事地内埋蔵文化財調査報告－』茨城県教育財団文化財調査報告第 50 集　財団法人茨城県教育財団

国立歴史民俗博物館　2006『特定研究　東国の豪族居館－茨城県常総市国生本屋敷遺跡調査報告－』国立歴史民俗博物館研究報告第 129 集

佐々木藤雄・大橋　生・林　邦雄・川口武彦・渥美賢吾　2006『台渡里廃寺跡－市道常磐 17 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）－』水戸市埋蔵文化財調査報告第 4 集　水戸市教育委員会

佐々木藤雄・川口武彦・林　邦雄ほか　2007『アラヤ遺跡（第 2 地点）－市道常磐 10 号線道路改良公に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第 12 集　水戸市教育委員会

佐々木藤雄・林　邦雄・川口武彦・関口慶久　2008a『台渡里遺跡（第 39 次）－公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第 15 集　水戸市教育委員会

2008b『渡里町遺跡（第 5 地点）－市道常磐 31 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第 16 集　水戸市教育委員会

佐々木義則　1997「木葉下窯跡群の須恵器生産－奈良時代前半を中心に－」『婆良岐考古』第 19 号　婆良岐考古同人会

外山泰久　1994「アラヤ前遺構（水戸市渡里町）をめぐって」『常総の歴史』第 13 号　崙書房

髙井悌三郎　1964『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会

田中　裕　2009「「豪族居館」と台渡里廃寺跡」『「古墳時代の大きな溝発見！」展講演会資料』

仲村浩一郎・後藤一成・宮田和男・芳賀友博・鴨志田裕一　2004『辰海道遺跡 1 －北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第 222 集　財団法人茨城県教育財団

生田目和利・稲田健一　2002「茨城県」『第 51 回　埋蔵文化財研究集会　装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～　資料集』埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会

橋本勝雄　1995「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』第 7 号　茨城県考古学協会

2002「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』茨城県考古学協会・茨城旧石器シンポジウム実行委員会・ひたちなか市教育委員会

藤村達巳・塩谷　修　1982「第 2 章　調査報告（1）古墳群の立地と環境」『常陸安戸星古墳』水戸市教育委員会

柳澤清一　1995「茨城県における加曽利 E4 式編年の検討」『茨城県考古学協会誌』第 7 号　茨城県考古学協会

矢ノ倉正男・小林　孝・川上直澄　2000『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅳ　熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 166 集　財団法人茨城県教育財団

山野井哲夫・齋藤　洋・野村浩史　2009『菱毛道西遺跡－株式会社エフピコ工場建設に伴う遺跡の発掘調査－』八千代町埋蔵文化財調査報告書 13　八千代町教育委員会

渡辺俊夫　1981「第 5 章　砂川遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 4　宮部遺跡・鹿の子 A 遺跡　砂川遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第ⅩⅥ　財団法人茨城県教育財団

写　真　図　版

1号溝土層断面および完掘状況（北より）

1号溝内遺物出土状況（北より）

3号溝内1号ピット完掘状況（南より）

3号土坑土層断面および完掘状況（東より）

1号ピット土層断面および完掘状況（北西より）

図版2

２号溝土層断面および完掘状況（北より）

１号土坑完掘状況（東より）

Ａ区ピット群（北より）

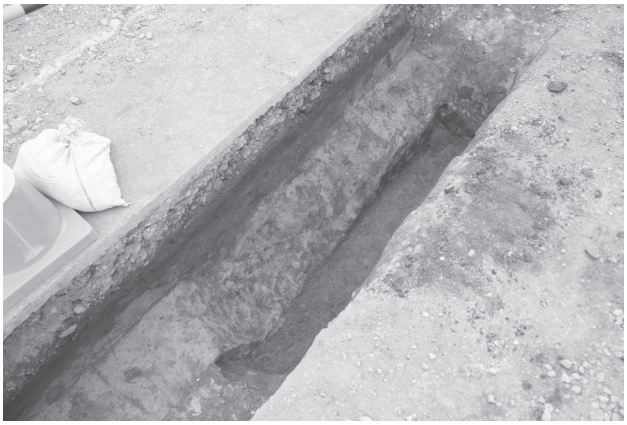
Ａ区完掘状況①（北より）

Ａ区完掘状況②（北より）

３号溝土層断面および完掘状況（北より）

３号土坑土層断面および完掘状況（東より）

Ａ区完掘状況③（南より）



12 号ピット完掘状況（南東より）

13 号ピット土層断面（南東より）

図版4

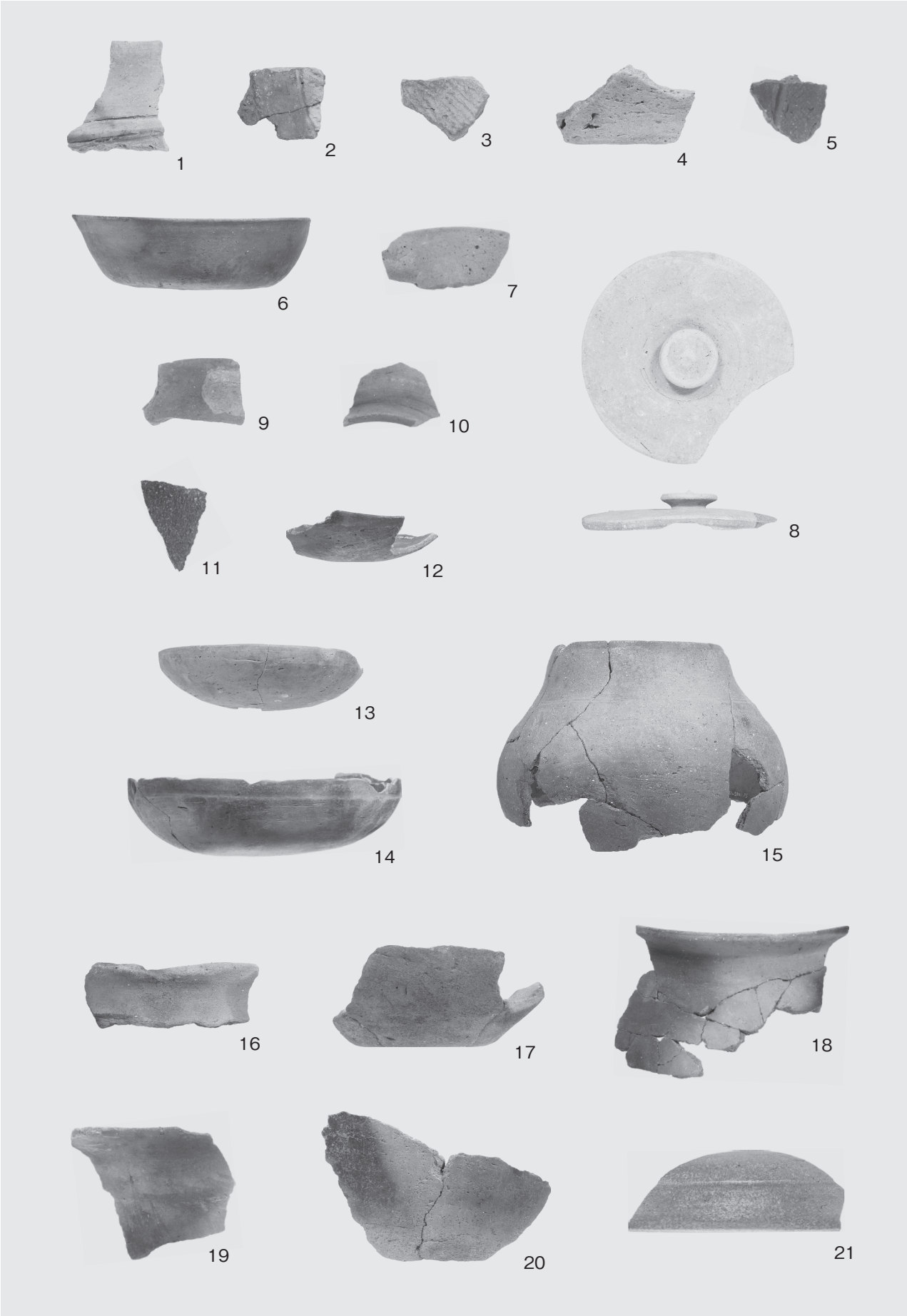
４号溝土層断面および完掘状況（北西より）

Ｂ区北側完掘状況（南より）

Ｂ区南側完掘状況（北より）

Ｃ区完掘状況（南より）

基本層序（東より）



出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	だいわたり　に
書名	台渡里　2
副書名	市道常磐283号線公共下水道工事に伴う発掘調査報告書（台渡里第51次）
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第30集
編集者名	渥美賢吾・林　邦雄
著者名	渥美賢吾・林　邦雄
発行機関	水戸市教育委員会
所在地	〒310-8610　茨城県水戸市中央1-4-1　☎029-224-1111
発行年月日	2009（平成21）年6月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
だいわたりかんがいせき 台渡里官衙遺跡	みとしわたりちょうあざまえはら 水戸市渡里町字前原 2699番先～2755番2先（市道常磐283号線）	08201	276	36° 24′ 08″	140° 26′ 15″	2009.4.6 ～ 2009.5.16	98.5㎡	公共下水道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
台渡里官衙遺跡	官衙跡 集落跡	縄文	土坑1基	土器	今回の調査において検出された古墳時代から奈良時代とした溝は，第32次・第41次・第44次調査でそれぞれ報告されている溝と関連する可能性が高い。今回検出した溝を含めたことにより，方形区画域の存在が想定される。その規模は約50×60mである。覆土中の遺物は，6世紀後半から7世紀前半頃と8世紀前半の2群に分かれ，前者の時期は溝が機能していた時期，後者は埋没し溝の機能を有しない時期とも推定される。この方形区画域は、区画内部施設の詳細が不明であるが，豪族居館跡や初期評衙の可能性を示しておきたい。 この地域は、北側に台渡里廃寺跡・那賀郡衙，南側に愛宕山古墳が立地する地域であり，調査成果によりそれらの遺跡との明確な関係性を示すまでには至らないが，前後の政治的中心に係る遺跡の存在も視野に入れながら，今後造営過程などを検討していく必要がある。
		古墳時代 ～ 奈良時代	溝4条 ピット2基	土師器，須恵器	
		中世以降	ピット1基	かわらけ	
		近現代・ 時代不明	土坑3基 ピット11基	－	

※北緯・東経は世界測地系。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。例）DWT-051・SD01-P1のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳，図面台帳，写真台帳があり，検索が可能なように作成している。合計1冊（綴り）。
遺物保管方法	・出土遺物は，報告書使用と未使用に分け，遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお，未使用分については種別毎に分類，収納してある。

水戸市埋蔵文化財調査報告

第 1 集	台渡里廃寺跡―範囲確認調査報告書―	2005 年 3 月発行
第 2 集	台渡里廃寺跡 ―市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）―	2005 年 4 月発行
第 3 集	大鋸町遺跡 ―グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2005 年 8 月発行
第 4 集	台渡里廃寺跡 ―市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）―	2006 年 3 月発行
第 5 集	台渡里遺跡―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2006 年 3 月発行
第 6 集	吉田古墳Ⅰ―史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 3 次調査報告書―	2006 年 3 月発行
第 7 集	大鋸町遺跡（第 3 地点） ―市道浜田 207 号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2006 年 3 月発行
第 8 集	圷遺跡（第 3 地点） ―ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2007 年 3 月発行
第 9 集	圷遺跡（第 4 地点） ―プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2007 年 3 月発行
第 10 集	吉田古墳Ⅱ ―史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 1 号墳の第 3 次発掘調査報告書―	2007 年 3 月発行
第 11 集	平成 17 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007 年 3 月発行
第 12 集	アラヤ遺跡（第 2 地点） ―市道常磐 10 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2007 年 3 月発行
第 13 集	米沢町遺跡（第 5 地点） ―住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2007 年 3 月発行
第 14 集	大串遺跡（第 7 地点） ―介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 3 月発行
第 15 集	台渡里遺跡（第 39 次調査） ―公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 3 月発行
第 16 集	渡里町遺跡（第 5 地点） ―市道常磐 31 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 6 月発行
第 17 集	渡里町遺跡（第 6 地点） ―市道常磐 34，275 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 6 月発行
第 18 集	薄内遺跡―移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 8 月発行
第 19 集	堀遺跡（第 9 地点）―宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 9 月発行
第 20 集	元石川大谷原遺跡―宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2008 年 12 月発行
第 21 集	台渡里 1―平成 18 年度長者山地区範囲確認調査概報―	2009 年 3 月発行
第 22 集	平成 18 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2009 年 3 月発行
第 23 集	吉田古墳Ⅲ ―史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 1 号墳の第 4・5 次発掘調査報告書―	2009 年 3 月発行
第 24 集	町村遺跡（第 1 地点）―共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2009 年 3 月発行
第 25 集	東組遺跡（第 1 地点）―物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	2009 年 3 月発行

第 26 集　荷鞍坂遺跡（第 1 地点）
—コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—　2009 年 3 月発行
第 27 集　大鋸町遺跡（第 8 地点）—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—　2009 年 3 月発行
第 28 集　雁沢遺跡（第 1 地点）—工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—　2009 年 3 月発行
第 29 集　渡里町遺跡（第 7 地点）
—市道常磐 23，31，307 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—　2009 年 6 月発行
第 30 集　台渡里 2
—市道常磐 283 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里第 51 次)—　2009 年 6 月発行

水戸城跡　三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書　2006 年 9 月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告　第 30 集

台渡里 2

—市道常磐 283 号線公共下水道工事に伴う発掘調査報告書(台渡里第 51 次)—

印刷　平成 21 年 6 月 25 日
発行　平成 21 年 6 月 25 日
発行　水戸市教育委員会
〒 310-8610　茨城県水戸市中央 1-4-1
TEL：029-224-1111
編集　株式会社東京航業研究所
〒 350-0855　埼玉県川越市大字伊佐沼 28-1
TEL：049-229-5771
印刷　関東図書株式会社
〒 336-0021　埼玉県さいたま市南区別所 3-1-10
TEL：048-862-2901